

新居浜市議会 市民との意見交換会 議会フォーラム 2016

開催報告書



平成 28 年 11 月 21 日 (月) ・ 24 日 (木)

新居浜市議会

目 次

	ページ
1 議会フォーラム 2016 の概要	1・2
2 開催結果	<3~41>
11月21日 福祉教育委員会	3~11
11月21日 環境建設委員会	12~22
11月24日 企画総務委員会	23~31
11月24日 市民経済委員会	32~41
3 来場者アンケート調査	
(1) 11月21日	42~45
(2) 11月24日	46~49
4 資料編 (会場ホワイトボード)	50・51

1 新居浜市議会市民との意見交換会「議会フォーラム 2016」の概要

①開催目的

市民との意見交換を通して市民の多様な意見を把握し、政策形成に反映させるため、市民（団体）との意見交換会を開催する。

②開催概要 ※各常任委員会ごとに2日に分けて開催。

日 時 I 平成28年11月21日（月）19時～20時30分（福祉教育、環境建設）
 II 平成28年11月24日（木）19時～20時30分（企画総務、市民経済）
会 場 消防4階 コミュニティ防災センター

③プログラム

11月21日（月） コーディネーター 愛媛大学社会連携推進機構：前田 眞 教授

第一部 福祉教育委員会

参加団体 新居浜私立保育園連盟

テーマ「保育園の課題について」

- ・保育士不足対応（待遇改善）・待機児童問題（育休復帰しても入所できない）
- ・保育士養成課程の短大（分校）の誘致

第二部 環境建設委員会

参加団体 新居浜市連合自治会、新居浜環境カウンセラー等交流会

テーマ「ごみの減量について」

- ・ごみの分別の徹底と市民の意識改革・ごみの有料化

11月24日（木） コーディネーター 愛媛大学社会連携推進機構：前田 眞 教授

第一部 企画総務委員会

参加団体 新居浜市消防団

テーマ「消防団の処遇改善について」

- ・総合防災拠点を活用した消防団員の資質向上
- ・地域の活動拠点施設としての消防団詰所・消防団の装備等の充実強化

第二部 市民経済委員会

参加団体 新居浜工業高等学校、新居浜商業高等学校、新居浜商工会議所、
ハローワーク新居浜

テーマ「若年層の市外への流出対策について」

④来場者数 11月21日（月）… 91人

11月24日（木）… 67人

⑤開催案内

市政だより／市議会だより 11月号

イベント 市民の皆さんの多様な意見を把握し、市政に反映させるため
各種団体との意見交換会を行います。

新居浜市議会 市民との意見交換会

議会フォーラム 2016 【コーディネーター】
愛媛大学社会連携推進機構 前田 眞 教授

常任委員会と関係団体との意見交換会 開催!

福祉教育委員会・環境建設委員会

11月21日(月) 19時～20時30分
会場：消防庁舎4階 コミュニティ防災センター
協議テーマ：
I 保育園の課題について
・保育士不足対応（待遇改善）
・待機児童問題（育休復帰しても入所できない）
・保育士養成課程の短大（分校）の誘致
新居浜私立保育園連盟
II ごみの減量について
・ごみの分別の徹底と市民の意識改革
・ごみの有料化
新居浜環境カウンセラー等交流会
新居浜市連合自治会

企画総務委員会・市民経済委員会

11月24日(木) 19時～20時30分
会場：消防庁舎4階 コミュニティ防災センター
協議テーマ：
I 消防団の処遇改善について
・総合防災拠点を活用した消防団員の資質向上
・地域の活動拠点施設としての消防団詰所
・消防団の装備等の充実強化
消防団
II 若年層の市外への流出対策について
新居浜商工会議所
新居浜商業・工業高校校長
ハローワーク新居浜

～参加は自由です。多くの市民の皆さんのご参加をお待ちしております～

議会フォーラム2016

4つの常任委員会と関係団体との意見交換会



参加費無料
事前申込不要
参加自由
お気軽に
お越しください

市民の皆さんの多様な意見を反映し、市政に反映させるため、各種団体との意見交換会を行います。参加自由ですので、多くの方のご参加をお待ちしております。

コーディネーター：愛媛大学社会連携推進機構 前田 眞 教授

会場：新居浜市消防庁舎4階 コミュニティ防災センター

福祉教育・環境建設委員会

日時：11月21日(月) 19時から20時30分
会場：消防庁舎4階コミュニティ防災センター
協議テーマ：
I 保育園の課題について
・保育士不足（待遇改善）
・待機児童問題（育休復帰しても入所できない）
・保育士養成課程の短大（分校）の誘致
新居浜私立保育園連盟
II ごみの減量について
・ごみの分別の徹底と市民の意識改革
・ごみの有料化
新居浜環境カウンセラー等交流会
新居浜市連合自治会

企画総務・市民経済委員会

日時：11月24日(木) 19時から20時30分
会場：消防庁舎4階コミュニティ防災センター
協議テーマ：
I 消防団の処遇改善について
・総合防災拠点を活用した消防団員の資質向上
・地域の活動拠点施設としての消防団詰所
・消防団の装備等の充実強化
II 若年層の市外への流出対策について
新居浜商工会議所
新居浜商業・工業高等学校
ハローワーク新居浜

お問い合わせ：新居浜市 議会事務局議事課 0897-65-1321

案内チラシ・ポスター

2 開催結果

議会フォーラム2016は、2日間合計で約150人が参加し実施された。

議会フォーラム2016議事録

日時 平成28年11月21日（月）19時～

場所 消防4階コミュニティ防災センター

■開会挨拶

市議会議長 近藤司



■総合司会

市議会議員 山本健十郎



<第一部 保育園の課題について> ※敬称略

【コーディネーター】愛媛大学社会連携推進機構：前田 眞 教授

【パネリスト】

（福祉教育委員会）

- ・ 三浦 康司議員（委員長）
- ・ 藤田 誠一議員（副委員長）
- ・ 仙波 憲一議員
- ・ 岡崎 溥議員
- ・ 永易 英寿議員
- ・ 藤原 雅彦議員

（新居浜私立保育園連盟）

- ・ すみれ保育園 園長 合田 幸広
- ・ めぐみ保育園 園長 井田 仁美
- ・ 泉川保育園 園長 西原 審
- ・ 朝日保育園 園長 合田 史宣
- ・ 南沢津保育園 園長 越智 志津香
- ・ 十全保育園 園長 小野 千代

フォーラム記録

●三浦議員<委員長主旨説明>



保育園に入所できない保護者が「日本死ぬ」のメールで全国的に話題を呼んだ。新居浜市についても表面上は待機児童はゼロであるが、希望する園に入れない、兄弟が同じ園に通えない、育休明けで年度途中ではほぼ入園できない等、市民の希望にそえないことが少なからずある。そこで保育士、施設のことについて皆さん方と意見交換の場を設けた。1回の会合で解決できる問題ではないが、明日に向かう力にしたいと思う。

○前田教授

新居浜市は待機児童ゼロということで、このことは凄くいいことだと思うが、今課題が3つほど提示されたと思うが、希望する園に入れない、兄弟が同じ園に入れない、育休明けで年度途中では入園できないという課題があった。まず、最初に希望する園に入れない課題について、意見交換ができたと思う。団体の方から、希望する園に入れないという現状について発言していただきたい。

●合田園長（すみれ保育園）

まず、保育士不足が近々の課題である。都

会だけが保育士不足とされている人もいるが、新居浜市も都会並に保育士の採用に困っている。10月から2週間来年度の新入園児の申し込み書を受け付けるが、園児の募集の数を見て、来年度保育士を募集するかどうかを考えるが、10月の中旬に短大や大学やハローワークに求人票を出しても、年によっては全くゼロというのが現状である。少子化問題がまともにあると思うが、子どもが少ないので、一人っ子の場合は松山市に行かずに、岡山や広島や神戸の学校に行く傾向になっている。松山の短大にも逆に岡山や広島から来られるという状況で、何か違うバランスになっていて、そういう方は地元に戻らずにそのまま勤められたりする現状がある。2年前は、新居浜から松山の短大に行った学生が一人しかいなかったという現状がある。そういう面で保育士の募集をしても申し込みがないという現状なので、その点を考えていただきたい。

○前田教授

保育士が足りないことによって、希望する保育園に入れない状況があるということであるが、他の方の意見は。

●井田園長（めぐみ保育園）



待機児童問題は、社会問題になっていて、都会などの一部の都市の話題と考えている人もいると思うが、新居浜市においても現実的には待機児童はかなりいると思う。保育園に入れなくて仕事を辞めたり、働くのを諦めて家庭保育をしている方がおられると思う。そういった潜在的な待機児童がかなりの数いると思う。保育園でも受け入れをしたいが、保育園には基準があって、ゼロ歳児だと保育士1人につき、ゼロ歳児3人という基準がある。1、2歳児では、保育士が1人につき、6人という基準がある。それと、部屋については、ゼロ歳児1人あたりいくらといった面積基準もある。保育士が確保されていても、部屋が狭ければ受け入れができない問題もある。4月当初に希望の園には入れなくても、新居浜市内で振り分けて待機児童がゼロ人となったとしても、途中入所については、特に夏以降の入所については、1歳児は厳しい状況である。今も保育園の空きがないかという電話がかかってくるが、ゼロ歳児や、1歳児がほとんどであるが、一般のお母さんでも気軽に考えていて、いつでも入れると考えている方も結構いるが、途中入所できるのはゼロに等しい状況である。

○前田教授

今話を聞いて、議員の皆さんからの意見もお願いしたい。

●藤田議員

保育士不足については、私が思うに待遇面や給料面だと思うがその辺はどうか。

●合田園長（すみれ保育園）

国の処遇改善等加算があって、平成25年度から3年間、加算により保育士の給料は上がっているが、他の産業と比べたら賃金は安い。東京など他市では、それを補填するために、1カ月1万円などを国とは別に加算されて保育士不足を改善するということもある。

●岡崎議員

厚生労働省の数字であるが、保育士は129職種中120位で、平均賃金のマイナス11万4,100円となっている。低賃金で子どもの人格の土台をつくる働きかけを行ったり、子どもの安全を保障していくのは大変だと思う。この辺で考えることが必要だと思う。

○前田教授

改善しないといけないことはたくさんあると思うが、お金があれば解決できるかもしれないが、お金はそんなに湧いてこないもので、なんらかの知恵を出していかないといけないと思うが、こんなことできたらいいというような考えがあるか。

●西原園長（泉川保育園）

処遇改善の話ではないが、保育士不足に通じることで、お願いがある。保育士養成施設の誘致をお願いしたい。厚生労働省でも人材育成として保育士養成施設の増加を唱えている。愛媛県内では、松山市に愛大、東雲、聖カタリナ、河原の4校があり、今治市は明徳の1校。宇和島市は、環太平洋の1校。大学、短大、専門学校あわせて計6校がある。現在東予地域には、明徳短期

大学の1校だけである。新居浜市に隣接している西条市、四国中央市にはない。平成2年まで、新居浜市にも桃山短期大学があり、たくさんの学生が新居浜市の保育園に就職していた。もし、新居浜市に養成校があれば、学校等の交流連携も密にできることや、保育士を目指す学生との交流も多くでき、その中で直接保育士の仕事の大切さや魅力、保育園のアピールもできることにより、新居浜市に就職する保育士の確保に役立つと考える。難しい課題もたくさんあると思うが、保育士養成施設の誘致を新居浜市にお願いしたい。

○前田教授



要望がでてきました。中々すぐには解決できることにはならないと思うが、保育士の不足をいかにカバーしていく考え方だと思うが、その辺り議員の方からはこんなことがあるよという意見はないか。

●仙波議員

今、貴重な意見をいただいたが、特に我々が、保育園に通っていた時代は、ゼロから3歳児は家庭で保育するのが当たり前という時代背景があって、今はそれとは違った時代背景だと思う。そのことが、行政の中

にも混じってきているのではと思う。実際には、子どもの数が減っていて、保育士を養成しても、その方達が一生その職業ができるのかという問題もあると思う。その中で、新居浜市も短期大学を辞めたという経緯もある。どのくらい需要があるのか。それが今後どのくらい続くのかという判断が必要だと思う。その認識がないと、中々、保育士の養成する施設を作るという話にはいかないのかなと思う。また、賃金の話であるが、129職種中120位という認識がなかったが、今その話を聞いてそうなのかなと。全国的には1万円出しているところや、家賃補助を出しているところがある。それらによって、解決するのなら、我々も話していきたいと思う。

○前田教授

保育士をふやすことを考えていくと、何人ふえたらいいのかということを目指して設定されることが必要だと思う。そのときに現状の保育士とリタイアされている保育士や、保育士免許を持たれている人の活用を総合的に考えてみて、そういう人達の働きやすい環境をどう作っていくのかを考えていくということもありかな。そういったことも含めた上で、本当に養成施設が必要であれば作っていくということも考えられる。人材が新居浜市の中にも含めて考えていくということも必要なのかなと、そういうことが今後できていけばいいなと皆さんの話を聞きながら思った。次の課題であるが、兄弟同じ園に入れられないというこ

とが現実にはあるのか。

●合田園長（すみれ保育園）

この問題については、5年前くらいからある問題である。タイミング良く、4月、5月に出産されてその後育休をとられて、翌年の4月、5月の連休明けまでに保育園に入所される方については、4月1日から入所できるが、夏場になると、ゼロ歳児はこの保育園にも入れない。育休延長を3月の末まで延長するしかない状況である。そこで育休延長するのであれば、子どもを家庭でみなさいということで、仕事を解雇になった事例も多数聞いている。

○前田教授

4月の時点で定員がいっぱいになってしまっていて、受け入れができない状況になっているということか。

●井田園長（めぐみ保育園）

ゼロ歳児は4月時点では、どこの園でも受け入れが可能である。1歳児はすでに4月でどこの園もいっぱいになる。その児童が2歳に上がるので、必然的に2歳も入れないという状況である。園によっては1人も受け入れができないという園もある。その2歳児が3歳になるときも、数名しかとれない。ゼロ歳児は途中からも入ってくるので、4月時点でゼロ歳児が空いていてもどんどんゼロ歳児がふえてくると、次の年には1歳になるので、その空いた分にしか1歳児は入れないという状況である。そういうことで、年齢によって、下の子どもが育児休暇明けで1歳。上の子どもが家で見て

いたが3歳になるので、保育園に預けようと思ったときに、途中から入れない。3歳は入れても1歳が入れないというどこの園にも兄弟で同じ保育園には入れないということはある。

○前田教授

そういう状況が出てきているということであるが、何か意見があれば。

●永易議員

私もゼロ歳、2歳、4歳の子どもがいるが、産休明け、育休明けで仕事復帰をしようとしてもどこの園に問い合わせをしてもゼロ歳児が園に入れられないという現状がある。そういった中、保育園を探すにも市の情報を見る、確認する、各園に断られる、保育園探しは働く女性にとっては負担になるということは現実的には把握している。そういった問題も、各保育園の情報と新居浜市の子育て支援課の情報を一体的にワンストップでできる仕組みができると、たまたまタイミング的に保育園に昼に電話したから入れた。夕方に電話した人はだめだったという現象も起きていると思う。ワンストップサービスの窓口ができると、多少は解決に繋がるのではということと、根底にあるのは、保育士不足ということがあるので、中々、年度途中入所というのは非常に厳しい現実であるというのは、認識している。

○前田教授

各保育園の情報をまとめてという話だが、現実的には可能か。

●井田園長（めぐみ保育園）

市の子育て支援課が窓口で毎月1日と15日にこの保育園に何歳児が何人入れるかという情報は出している。

●永易議員

1日と15日の情報であるので、その間のタイミングでもし空いたときが急きょ変更があれば・・・

●井田園長（めぐみ保育園）

もし変更があれば、一応出すようにはしているが、どこの園もほとんど夏以降はゼロに等しい。

●永易議員

長男のときはたまたま空いたときに入れた。

●井田園長（めぐみ保育園）

途中でやめる子が出たりする場合は空きが出たりするが、園によっては、在園の下の子が待っている場合は、在園の下の子に声をかけたりして空きがうまってしまうというようなこともある。なるべく空きが出た場合はタイムリーに市に情報を提供するようにはなっている。

●永易議員

園と市はできているが、その当事者にはタイムリーな情報が中々いっていない仕組みだと思う。問い合わせだけをして、その一回で切れるので、後追いで空いたという情報は当事者には連絡がいかないという状況であると思う。

●井田園長（めぐみ保育園）

それはあると思う。どこかから見れば、どこの園に空きがあるというシステムがあれば、いいと思う。

○前田教授

そういう情報を発見する仕組みがあれば、少ないけど何かの参考になるかもしれない感じではある。園に受け入れる余裕がないと、中々そういうことも難しいとは思いますが、そういう中では保育士をいかにふやしていくかどうかということが凄く大事なところになると思う。この兄弟同じ園に入れないう状況について他の方から意見があればお願いしたい。

●合田園長（朝日保育園）

どの子がどれだけ保育が必要かで点数が決まるので、例えば、この子は何点満点中何点というように順番を決められるので、そのまま流れていけば、この子は何点だから第1希望の保育園に入って、この子は何点だから第3希望の保育園ということになる。そうなったら、それに従ってこの子はこの保育園に入ったということになるので、そこで兄弟の場合は加算をしてあげればいいということになると思う。平等にしたらいいという意見もあるが、親は2つの保育園を走り回らないといけないことになるが、その辺は配点の方法を考えるべきでは。

○前田教授

配点の決め方はどのようにして決めるのか。

●仙波議員

今言われたような考え方については、市でも持てるのではないかと思う。それについては改善の余地があると思う。

○前田教授

そういう技術があるのであれば、そういう

ことに応えていけることを考えていけたらいいかなと、そういうことをこの2つのセクターで考えていただいて、市民も自分達の子育て支援に関することを考えていただいたらやりやすくなるのではと感じた。この話だけで終わらすのではなくて、今後もそういうふうなことを考えていく場ができたらいかなと。先ほどの情報の一元化ができたというイメージはあるが、それを発信する仕組みがあればいいかなと思う。そういうところを作っていく。点数の付け方を考えていく。これからの課題だと感じた。

●仙波議員

情報の一元化という中で、親に対する行政のフォローがあれば、もう少しその辺の余裕があるかないかを含めて何月に生まれるのであれば、こうだというのを行政側がもう少し折れれば若干解決できるのではと考える。

○前田教授

どこまでの情報を入れるのかを含めて、個人情報もあるので、出産の状況を見ながらその辺の情報も加味できるような情報の発信の仕方とかを、こういう園が今空いているという話が、生まれた子どものところで、育休が明けるときに、伝えていけるとか、きめ細かなところがあればいいのでは。きめ細かさをするときには、コストをどうやって負担していくのかというのが次の問題として出てくるのではと感じた。そういったことを解決すれば、育休明けの入園も

基本的には課題は同じだと思う。そういう人達がどういう風にしていくのか、ここが解決できることによって、より子どもを抱えている家庭が楽になる、より働ける機会がふえる。その話で言えば、これから労働力が不足するような状況が盛んに言われている状況であるので、女性活用も含めて出てくると思う。先ほど育休明けに入園できないという話があったが、純粹に園に枠がないということで考えていいのか。他にも原因があるのか。

●合田園長（すみれ保育園）

その問題については、一番初めに提案した保育士不足。保育士の数は年度当初で考えるので、新居浜市の場合は、平成16年の台風がくるまで、愛媛県の中では、一番素晴らしい子育ての支援を行っていたと思う。その当時までは、加配があって、年度当初に臨時保育士2人分のお金を。そのお金は何に使ってもいいが、年度当初に保育士確保しなさいということで、2人分の約470万円が各園に出ていた。そのお金をもとに募集も行えるので、年度当初の職員の数よりプラス2人の採用をしていた。年度途中での育休明けなどのフォローはできていた。そのころは保育士不足は聞いたことがないくらい、保育園としては保育士募集にあたって、ここまでの苦労はしていなかったのが現状である。

●岡崎議員

保育士不足の根源は、平均賃金より11万以上安いことである。なぜそういうことにな

っているのかは、根本的な問題で例えば、日本の保育、幼児教育予算はGDP比 0.45パーセント、OECDの35カ国中最低である。それだけの予算しかないので、保育士は冷遇されて大変な状況に追い込まれていて、人が集まらないなどの様々な問題が生じているのではと思う。政府に対して、約5万円の引き上げを要求したが、できるかできないかはこれからの問題ではあるが、市として2万円くらい保育士1人当たりについて賃金助成や、非正規を正規化するなど保育士確保のための対策をとらないといけない。政府が上げる運動とあわせて、市としても努力する必要があると思う。

●藤原議員

3つの観点から書いているが、基本的には人材不足だと思う。娘も保育士をしており、親から見れば、本当に大変な仕事であると感じている。岡崎議員からも言われていたが、国の方である程度横断的な方向を示さないといけないのではと思う。小学校、中学校の教員は、人材確保法という法律があって、それに基づいて身分の保証、賃金のこと書かれている。市議会議員であるので、国の法律のことまでは言えないが、できたら保育士の人材確保たるものの法律をつくっていききたいと思うし、そういう動きを行っていききたいと思っている。それが一番根本ではないかと考える。

●神野議員

根本的なものというのが、保育士が不足しているということで、私が疑問に思ったこ

とは、先ほどめぐみ保育園の井田園長が言われたように、4月時点で定員100パーセントになっている、100パーセントを超えている、ここが大きな問題であって、根底は保育士が足りていないや、処遇の改善が必要ということに繋がると思うが、前田先生から提案があったが、免許を持っていても活用していない人、リタイヤした人、潜在的な先生方をうまく活用するために、元を返すと処遇の改善になってくる。先ほど平成16年の災害が起きるまでは、加配があったというのは、私は知らなかったが、そういったことを前向きに考えていくのも行政の仕事ではないかなと今回改めて思った。

○前田教授

この保育士の問題については、保育士がふえていく、今足りていない保育士をどう改善していくのが根本的な原因かなど。それらを当面補うためには様々な情報を求めている人に発信する仕組みがあればいいかなということもあるし、社会に埋もれている潜在的な人材の再活用のあり方、掘り起しをしていこうという話でもあるし、もっと言うとお互いの家庭間で預かりあえるような環境を作っていくということもあるのかなど。そういったときに、潜在的な保育士の免許を持っている方が関わっていくなど、少し柔軟な考えがあってもいいかなと思う。法律に基づいていろんな基準で決まるところと、自分達が動いてカバーできることもあるかなと思った。法律は国が動かないといけないとか、市が動いてくれれば

オッケーであるが、そうではない民間が、市民が関わっていくところで解決できるところは、自分達がリーダーシップを発揮していただくのが、市議会議員で、そういう問題と一緒に考えていって、現場で苦労している意見がその場で吸いあげられていくなどの話。今日みたいな意見交換会の場だけで終わるのではなくて、定期的に何か行われることなどによって、今後の新居浜のあり方が生まれてくる。新居浜バージョンみたいなのが生まれてきたらいいと思った。会場の方から意見をお願いしたい。

一般からの意見

●男性



保育園の経営的な問題もあると思うが、その年にならないとばらつきがあって、ある年はゼロ歳児が多かったということで、職員の正規と非常勤のバランスなど様々な問題があって、難しいと思う。そういう面もあると思う。そういうことで、育休明けで入園できない件は、看護師や介護士についても、勤めたいけど子どもが預けられない。保育士だけでなく、他の福祉の関係者と連携して発信していけばいいと思う。

まとめ

○前田教授

経営のことも大変だと思うので、そういったことも網羅できるようなことができればいいなと思いながら、これで一部の意見交換会を終える。

議会フォーラム2016議事録

日時 平成28年11月21日(月)19時50分～

場所 消防4階コミュニティ防災センター

■第二部司会

市議会議員 仙波 憲一



<第二部 ごみの減量について> ※敬称略

【コーディネーター】愛媛大学社会連携推進機構：前田 眞 教授

【パネリスト】

(環境建設委員会)

- ・ 篠原 茂議員 (委員長)
- ・ 小野 辰夫議員 (副委員長)
- ・ 近藤 司議員
- ・ 藤田 幸正議員
- ・ 佐々木 文義議員
- ・ 井谷 幸恵議員

- ・ 新居浜市連合自治会会長 日野 幸彦
- ・ 新居浜市連合自治会副会長 星加 勝一
- ・ 新居浜環境カウンセラー等交流会
会長 眞鍋 昌裕
- ・ 新居浜市シルバー人材センター
理事長 佐々木 俊洋
- ・ 新居浜環境カウンセラー等交流会
後藤田 直良
- ・ 泉川校区まちづくり連合自治会
副会長 野本 敏久
- ・ にいはま環境市民会議
副会長 太田 初

■閉会挨拶 市議会副議長 永易 英寿

フォーラム記録

●篠原議員〈委員長主旨説明〉

本市の長期総合計画を見ると、人と自然が共生する快適な環境をつくりあげていくために、一人一人が環境への理解や認識を持ち、ごみの減量・リサイクルなど資源を最大限に活用する循環型社会への移行や、地球環境負荷軽減に積極的に取り組むことが求められている。しかし、本市の市民一人当たりのごみ排出量は全国の約 1.2 倍、リサイクル率は全国より約 3% 低く、ごみステーションへの不適正排出も多い状況である。今回の意見交換会で、ごみを減らすために何をすればよいかを皆さんと一緒に考えたい。



○前田教授

ごみ減量というすごく大変なテーマだが、地域にとって大事なものである。このテーマについて、今日来られている皆さんからご意見があれば自由に発言していただきたい。

●日野会長（新居浜市連合自治会）

このごみの問題は、私たち自治会が、新居浜市が打ち出しているステーション方式を採用している。ステーション方式を採用して我々連合自治会が携わっている団体は、ほかにはない。その中で生活ごみが大きいのが、篠原委員長からお話があったが、新居

浜市の現状は愛媛県一というようなことである。これはいろいろ問題がある。市のごみステーションに産業ごみを持ち込んでいる。民間に出さないで、新居浜市が受け入れるということで、私はそれが大きなメリットを生んでいるんじゃないかと思う。もう一つは、市民の意識がやはり不足しているんじゃないかと考えている。昔、平成 22 年頃か、不法投棄というものが、どこの山へ行っても捨てていたが、今は市民意識がなって、少なくなったのが現状である。山へ行ってもあまり捨てていないのが見られない。これは行政の力であり、市民の意識改革ができたんじゃないかと思うが、もう一つは、我々が今している生活ごみ、これが、私は自治会の問題、自治会が管理しているので、自治会数の問題が起きているんじゃないかと思っている。会員が年に 0.1% 減っているのが現状である。先ほど申したように、ステーションを自治会が管理しているために、そういうところの不法投棄というか、そこの近くに出して、それを行政がとって帰る。そしてもう一つ大きな問題がある。それは、ステーション方式と言いつながら、地域によって、ステーション方式をされていなくてある。これは、ここにおられる皆さん方も御存知か御存知ないかもしれないが、各家庭の軒下に出しているものも収集しているのが新居浜市の現状である。ここらあたりを徹底していただかないと、そういうものができないのではないかと。6 種分別から 9 種分別へ移行したが、自治会が当番制でいろいろごみの仕分けをしたり、取って帰ってくれなかったら、自治会員が仕分けをしてちゃんとしている。そういうのはいいが、自治会に入っていない

い人が、ちゃんとしてくれている人もいると思うが、中にはめちゃくちゃに分別している。もう一つお願いしたいのが、今現在ステーションの容器を我々自治会が設置している。行政からはお金をいただいている。これが、市民に不公平になっているんじゃないか。私はいつも思うのは、防犯灯LEDは市長さん、あるいは議員さんのおかげで、犯罪が起きるんだからということで、全体を明るくしていただいたが、次はごみのうんぬんをしていただかないと、新居浜市は、本当の意味の、我々が理念としているすみよいまちづくりというものが達成しにくいんじゃないかと思っているので、そこらあたりを含めて御議論していただいたらありがたいと思う。

○前田教授

ごみ減量についてということで、一つは自治会の集め方の問題がある。ルール違反する人がいるかもしれない、自治会の組織力がちょっと弱まってきているんじゃないかという意見もあったと思うが、ほかに意見は、どうか。

●星加副会長（新居浜市連合自治会）

お手元に配っている船木校区の環境ごみ対策の写真があるかと思う。簡単に説明させてもらう。船木のごみ対策としては、その写真にあるように、清掃作業、これはどこの校区もやっているかと思うが、自治会のエリア内については自治会でやる、自治会のエリア外については、連合自治会が主体になって、有志を集めて実施するというようなことでやっている。そして生ごみの堆肥化については、隣に眞鍋先生がおられるが、眞鍋先生のご指導を受けながら実施している。下側は不法投棄防止の掲示板であ

るが、左側はごみステーションを使用する方の氏名を書いている。これ以外の方はこのごみステーションを使ったらいかんよというような掲示で、こういうところは比較のごみステーションがきちっと守られているようである。裏側は、ごみステーションに不法投棄されているごみで、回収されないものを月に1回収しようということで、これも10年くらいやっているが、ごみステーションに不法投棄ごみがあるが、どう処分したらいいかわからないという自治会長さんがおられたので、相談して、じゃあ月1回、持って帰っていただけないごみを集めようじゃないかということで始めたのだが、左の写真は結構軽トラが来ているが、いつもはこんなにいない。船木は不法投棄に関心持っていますよとアピールするために、車が多いときの写真をつけている。中ほどは、ごみステーションにごみカレンダーを掲示している。これは半年ごとに掲示しており、70数か所あるが、こういうごみカレンダーをつけておくことによって、われわれ地域としてはごみステーションの管理をしているというアピールを与えているわけである。一番下は、不法投棄防止の掲示で、左が不法投棄防止ののぼり旗、右側はぼろぼろでちょっとわかりにくいですが、カメラ等により監視中と、これに対してはカメラどこに据えとんど、と言われるが、それは秘密じゃ、ということで通している。こういう活動で船木のごみは多少は減ったんじゃないかと私自身は思っている。

●日野会長（新居浜市連合自治会）

ちょっと補足させてもらう。今我々調整した中で、自治会が管理しているステーションが、新居浜市で3,983か所ある。ちなみ

にその中で自治会が 2,232、あとはその他で、マンションとかいろいろな人のところが 1,751 か所である。



○前田教授

そういう状況の中で、地元として頑張って、そういうことを少しでも減らすために、ごみを適正に出してもらって、管理するようなことを考えましょうというようなことをやっているが、少し、議員の皆さんのほうから、この辺のことを考えたらどうかとか、ご意見があれば。

●篠原議員

ごみの減量ではないが、ごみのことで、近所のトラブルが発生するというのを日野会長がおっしゃったが、そういうトラブル、ごみを回収するシステムを皆さんでいろいろ、どのようにしたらいいんだろうという是正する方法などを考えていったらいいんじゃないかと思う。

○前田教授

ほか、ご意見ないか。ごみの減量ということを見ると、例えばルールを守るとかごみの出し方のシステムの話があると思うが、直接現状とつなげていくようなことを考えたときに、こんな課題があるんじゃないかとかあれば、そのあたりいかがか。

●眞鍋会長（環境カウンセラー等交流会）

いろいろな各論があるが、その前にちよっ

と総論的なことをお話しする。私もこういう環境関係で十数年市民活動をやっているが、時々出てくるのがごみをなぜ減らさないかんのかという質問である。言われるとちょっと困る。ある時期までは、もったいないというキーワードで話をしていたが、この頃段々世代のギャップがあって、もったいないが通じなくなってきた。最近考えることだが、年配の方が多いが、私の子供の頃、昭和 20 年代、30 年代前半くらいまで、私の周りにはごみというものがなかった。というのは、結局収入も少ないし、必要なものだけしか手に入れない。また、手に入ったものを、徹底的にリユース、リサイクルで使い切る。徹底的に使って最後は土になって還すという生活だから、ごみが出るはずがない。ところが昭和 40 年代、50 年代、60 年代と、段々時代が下がってきて、高度成長期。その時代というのは大量生産、大量消費。ということは、それに伴って所得倍増もあった。そうすると皆さんの家庭でものが使い切る前に入ってくるわけである。そうするとどこかで余分があるわけである。食べ物もそうである。それが全部ごみになった、だからごみがふえてきた。その間何が起こったかということ、一番大きな問題は地球温暖化である。関係ないように皆さん思われるかもしれないが、結局我々の毎日の生活が地球温暖化を起こしているわけである。ごみ量の増大、これすなわち地球温暖化そのものである。地球温暖化を抑えようとする、ごみ減量しなければならない。もったいない精神でいくと、ぜいたくはちょっと節約しないといけない、根本のところに行く。理屈ではない。そうになっている。今、世界的にも COP 22 とか

パリ協定とかで、日本も 25%炭酸ガスの排出量を減らすという目標を世界に公約しているが、恐らく国もこれから一生懸命やると思うが、どうしたらいいかという、省エネとか省資源と言うが、一番手っ取り早い目安はごみ減量である。ごみ減量は生活の結果だから。そういう目で見て、もう一回我々の生活を見直して行ってほしい。先ほど自治会長からいろいろあったが、結局最後はごみ減量は個人の生活である。行政がこうしようとしても、なかなかできるものではなくて、最後は市民一人一人がどういう生活をするかによって決まるわけだから、それがやりやすいようなシステムを考えるのが、我々の立場かなと思う。

○前田教授

最近どうも暖かいなと実感できることもあるかなと思うし、海面の高さが上がるのではないかとかいう話も出てくる。そういうことは自分たちの生活の積み重ねから改善していかないとだめというようなことがあるというので、世界的にもCO²削減みたいな、地球環境をどう守っていくのか、維持していくのかという話につながってくると思うが、やはり、自分たち身近な生活にそこをどうつなげていけるのかということがすごく大事なかなと思う。そういったときに、ごみを減らしたいのは、そういう大きな、これからの生活を守るためには、手間をかける必要があるのだが、そのために今何が課題なのか、減らす上での課題、収集する仕組みの課題があると思うが、減らすにはこういうことをちゃんと変えないとだめじゃないかとかいうことがあると思うが、その辺いかがか。

●佐々木理事長（シルバー人材センター）

地球温暖化の問題については、先ほど眞鍋先生から話があったが、これは全人類的な課題であると考えている。そこで、我々として何ができるかということだが、御案内のとおり、シルバー人材センターでは年間かなりの量の剪定の仕事を市民の皆さんからいただいている。そこで発生する剪定くず、これが年間約 300 トン出てくる。これを何とか有効な資源に改良して緑農地に還元していこうということで、来年度からこの事業に取り組んでいきたいと考えている。ちなみに約 300 トンのごみを減量すると、CO²に換算して 85 トンの削減につながってくる。85 トンと申してもなかなか難しいと思うので、比較というか、皆さん御案内のとおり、樹木はCO²を吸収して酸素を出して、CO²を固定化するという大きな能力を持っているが、それで換算すると、50 年生の杉の木 6,000 本が吸収するCO²を削減するという事になってくる。これはまた非常に難しい科学的な問題が出てくるが、これも新居浜市の環境部の協力をいただいでこういう数字を出したわけだが、いずれにしてもごみの減量がストレートにCO²の抑制につながるということになるので、皆さん御案内のような異常気象の現象とか予測もしないような台風のコースだったり、そういうことも地球の温暖化に起因するところが大きいと考えている。それからもう一つは、この 300 トンを減量すると、市民 1 人が年間排出する量の 700 人分のごみが減量できる。それともう一つは、皆さん御存知だろうが、清掃センターでごみを処分する、だけではないが、収集運搬ということもあるが、それに要する経費が年間 15 億かかっているということで、微々

たるものだが、我々シルバー人材センターが300トン減量すると、年間900万円のごみの処理費の節減につながってくるということである。今現在はシルバー人材センターが受注した剪定くずだけを考えているが、これに加えてできれば民間の剪定くずもシルバー人材センターで引き受けて、緑農地還元という形で、資源の循環サイクルに乗せていきたいと考えている。いずれにしてもごみを減らすということはCO₂の抑制につながるとのことなので、そういうことで今後とも事業を進めていきたいと考えている。

○前田教授

なぜごみを減らすのか、という話は大きくは地球温暖化、地球環境を守るという話になるが、身近なところでいうと、目の前にあるごみを資源化していく、ほかの使えるものに変えていくというところと、もう一つは、処理コストを安くする、低減する。じゃあ、安くなったものをどう使うのかというのは、次の展開に使うのだろうと思うが、コストを下げていくということが少しあるかな。じゃあ、ごみを出さない生活の仕方はどうしていくんだとかみたいなこともあるかなと思うが、そういうところから考えてごみを減らすときに、例えば、僕は伊予郡松前町に住んでいるが、そこはごみ袋を買わないと出せない。ごみ袋有料化とか言うが、なかなか皆さんとしては議論しにくいテーマかもしれないと思うが、そのあたり含めてどうか。

●小野議員

個人的には、三角コーナー、生ごみを水切りし乾燥して出すということと、冷蔵庫の中をよく見ていただく。いろいろ古いもの

があったら、買い止める。こういうことをするだけでも、だいぶ違うんじゃないかと思う。高津校区で以前に、有料ごみ袋をしたが成功しなかったということがある。いろいろ個人の問題もあるので、有料で図ったが、自治会とリンクしており、自治会加入の人は無料で渡した。非加入の方には買っていたということでもいろいろあったが、以前にやったが成功しなかったという経緯がある。

○前田教授

これからのことを考えていったときに、ごみを減らすときに一番きくのは、何か。ごみを乾燥させるとか、冷蔵庫の中を見直して余計なものをあまり買わないとかいうのもあるし、買い方で言うと、スーパーではレジ袋であるし、容器をどうするのかというところもあるかなと思うが、そのあたりで、こんなことをしたらごみ減るんじゃないかという話があれば。

●後藤田（環境カウンセラー等交流会）

今お話があったようにごみの減量化という中で、家庭から出る生活ごみの一番大きな割合を占めているのは生ごみ、これが大体30%くらい占めている。この生ごみを今言われたように乾燥化するのだが、それよりももう一歩進めて、何とか家庭で堆肥化するということで、生ごみとして回収に出さないというようなことを、私たち市民活動として取り組んでいる。現在、市のごみ減量課と協働事業として市政だよりも生ごみ段ボールコンポスト初回講習会というのをお知らせして、市民の皆さんに募集をかせせていただいている。各公民館で段ボールコンポストというのをを使って、従来のコンポストだと土地がないと使えないが、段

ボールコンポストだと集合住宅みたいな土地のない方でも手軽にごみの堆肥化ができるというような取り組みをさせてもらっている。この段ボールコンポストは大体1年で維持費として5千円くらいかかる。家庭からでるごみの回収費、処理費、これが大体おおまかに8千円くらい市のほうで負担がかかる。段ボールコンポストで処理すると、トータルで3千円くらいの経済的メリットもあるので、ぜひこういう形で、経済的効果と実際に各家庭から出るごみの排出を少なくするというところで、私ども新居浜市の1割の家庭の、5千戸の家庭に、そういう段ボールコンポストのお願いができないかということで、毎年頑張っている。今年は、公民館を中心に77の会場、日にちで講習会を実施して普及活動している。ぜひ皆さんこういった会合に参加するようにして、家庭から生ごみを出さない、堆肥化するんだということで、少しでも減量化に努めていけばいいんじゃないかと思う。

○前田教授

段ボールコンポスト、いい仕組みが広まってきているかなと思う。

●藤田幸正議員

ごみの減量と言うが、ごみは全体が限られている。いくらか決まっている。その中でまずは、ごみの発生抑制に努めていかなければいけない。これからメーカーとかいろんな方々にもそういうふうにしていただくのと、特に新居浜市では1人当たりのごみの排出量が多い。それを長期総合計画では844グラムにするという非常にすごい数字を挙げているが、いずれにしても皆さん方いろいろ言われた中で、生ごみの水分を減らすだけで量が減ってくる。それと、今言

われている、生ごみの堆肥化。家庭では、いろいろ後藤田先生、眞鍋先生が言われたことがあるが、シルバーさんもそういったことで堆肥化をしていくと。以前ほかの自治体でもあるが、生ごみを堆肥化する。特に事業系の生ごみ。事業としてだけでは採算があわない。生ごみを処理してくれるんだから、行政として使う分を補助にして、事業として成り立つようなことに取り組むべきではないか。事業者単体ではなかなか難しい。それに行政が補助を出して、生ごみを堆肥化する。焼かなくてもいいし、それがリサイクルにつながる、土壌改良になっていく。家でも、土がある人は家で生ごみを処理していただく。コンポストでなく、ただ埋めるだけでもそれはできる。一番できるのは、小野議員も言われていたが、水分を切ること。あとは、出てくるごみで処理できないもの、それについてはリサイクルしていくものと完全に焼却して処理をするものに大別されてくるのではないか。そのときに、自治会とかいろいろな組織、我々を含めて皆さん方で市民の意識改革をして、いろいろ方法を考えていくと、少しでもごみの減量につながるのではないか。それと先ほども言われていたごみの有料指定袋、これは非常に公平なごみの排出である。今は新居浜市だと多く出す人も少ない人も公費で賄うから負担がわからない。だが、ある程度で線を引いて、それ以上の人は袋を買っていただく、そうなってくると、有料にしたからといってごみの発生量は少しは減るが、そのときにいろいろな家庭で処理できることでも取り組んでいただけると、それにつながってくる。まずは、多少なりとも受益者負担をしていただくというだけ

で、意識改革の一つにもつながるんじゃないかと思う。

○前田教授

少し意識が変わっていけばいいかなということと、生ごみ以外のリサイクルということが出てきた。生ごみ以外のリサイクルは何かできれば一番いいのかという案というか、その辺。

●太田副会長（にいほま環境市民会議）

職業柄、ごみの収集運搬の会社をしており、民間の事業者のごみをとったり、新居浜市の委託を受けてごみをとっている。皆さん、ごみの減量について、減らしたいということで話をしているが、その前に、私たち収集運搬の人間から言わせると、まず、どのごみがどういうふうな種類のごみなのかということを市民の皆さんがどれだけ理解されているかということが一番初めに大切な問題になるんじゃないかと思う。どういうことかという、私はたまにパッカー車に乗ってプラスチックのごみを各ステーション、一日大体 90 ステーション回るが、助手席に乗って回ってみた。そのときに一日大体 5、6 件から 10 件くらいのステーションに、分別されてなくて捨てられているごみが多い。ごみが分別されていないときは、私たち業者は、これは収集できませんというステッカーをごみに貼って、そのステーションに置いて帰るが、そのときに私がちょっと見て思ったのは、そういうシールを貼っているところに、多くまた次のごみが出てきて、また分別されてなくてまたシールを貼っているということで、どんどんどんどん収集できないごみがステーションに重なっている。そういう現状があるかなと思っている。これは、比較するとおかし

と言われるかもしれないが、同じ県下でも松山市に関しては、人口が 50 万人以上いると思うが、その都市では、ごみの排出量全国一位を何年もずっと繰り返されている。リサイクル率に関しても全国でもトップクラスの都市である。何が結局問題なのかというと、分別するというか、例えばこのごみがプラスチックだ、このごみが生ごみだ、このごみが資源ごみだというのをきちんと市民の方が、特にごみに関しては男の方より女性の方のほうが管轄するほうが多いと思うが、きちんと本当に理解されてごみを捨てられているかということが大切なかなと思っている。やはり松山なんかは、新居浜でもあるが、ごみのカレンダー表があるが、その中に松山は冊子みたいなのをつくって、このごみはこの種類のごみですよ、というのをいろいろ項目の例を出して、ちょっと厚い冊子にして、市民の方や事業所の方に配っている。そういうことを新居浜市はもっとするべきではないかと思っている。そういうことによって、本当にごみを理解して捨てていく、ごみは必ず生活する分においては出てくるものだと思う。だったら、出てくるものをどうやってきちんと処理していくか。今でも新居浜市はリサイクルをされているが、分別をしているが、実際清掃センターに行ったら、その分別しているごみを、また清掃センターで、人間の手で分別している。そういうことによって、年間 15 億円のお金をかけて、処理しないし収集運搬をしている。これはすごく無駄なことをしているのではないか。分別して出しているのに、また清掃センターで分別する、これこそまさに二重の無駄であると思う。生ごみも考え方によってはエネ

ルギーになる。私も愛媛県産業廃棄物協会の一員として、リサイクル事業に関していろいろと委員会に出ているが、生ごみも全国で先進なところでは、メタン化して電気に変えているところも実際ある。それも行政がされている。おそらく、今日前にいらっしゃる市議会議員の先生方も視察なんかでそういったところを見に行っていると思う。そういったときに、それをいかに新居浜市に役立てるか、先ほど藤田さんが言われたように、もっとそういうことも考えていただきたいと思う。それとあともう一つ、ごみの単価である。新居浜市は、清掃センターに事業者がごみを持っていくと、1トン8千円である。だが、大都市では、1トン当たり2万円は超す。これだけの差が出ているということである。これが、結局は安く処理ができるからみんなそういうふうを考えてしまうんじゃないかなと思うので、そこをもう少し皆さんで考えていただければいいのかなと思う。

○前田教授

時間もなくなってきたが、今の話を聞いてどうか。

●井谷議員

有料化のことと、分別のことが出たと思う。長期総合計画でも家庭ごみの一部有料化について慎重に検討すると出ている。私は家庭ごみの有料化には反対である。いろいろな経済状態の家庭がある。本当に大変なところも多いので、経済的に余裕がある家庭が多くはないと思う。家庭ごみの処理は税金の範囲で行うべきだと考える。また、一部有料化、持ち込みごみを有料化にという話も聞くが、家庭ごみの持ち込みがものすごく多くて苦慮しているということもお聞

きした。私は実は、出すべき日に出さなかつたりして、たまに持ち込みをしていた。すぐにごみがたまってしまって、紙ごみ、ついでにプラスチックごみ、瓶、缶も持ち込んでいた。先日も第2日曜日に清掃センターに持ち込んだ。確かにたくさんずらっと並んでいた。多いなと思った。やはりごみステーションに持っていくごみも、清掃センターに持ちこむごみも、毎日の生活の中で出たごみで、市が処理すべきごみではないかと思う。有料化には反対だが、ごみの分別のための啓発活動というのは、本当に粘り強く繰り返し、具体的にやらなければいけないと思っている。私も今回のことで、燃やすごみの中に正しく分別されていない紙ごみやプラスチックごみが22%もあるということを知ったし、小さな雑がみは、つつい燃やすごみにしていたが、捨てる雑誌の間に挟んで一緒に縛って出すということとか、マヨネーズなどのチューブは真ん中で切ると綺麗に洗えるとか、そういうことで簡単に分別できるようなこともあり、私も実践していきたいと思っている。有料化にはちょっとあれだが…。

○前田教授

途中で切って申し訳ない。そろそろ時間がきているので、最後。

●日野会長（新居浜市連合自治会）

今、井谷先生が言われたように有料化反対ということだが、私たちが考えているのは、最終的に有料化をしたほうがいい。市民の意識改革をするためには、先ほど皆さん方がいろいろ論議をされたが、やはり人間というものは損得を一番に考える。だから、有料化することでごみは減ると私は思っている。やはり今、藤田先生が言われたいろ

いろな有料化の方法を、考えるべきではないかな。そういう時代にこないと、市民の皆さんの意識改革ができない。そして有料化の限度というものがあると思うが、やらないと、なかなか今の不燃ごみを、なんでも不燃ごみに放りこんだらいいんだ、なんぼでも無料でとって帰ってくれるんだというような市民の意識が改革できないのではないかと私は考えているので、ぜひそこらあたりを考えていただいたらと思う。

●篠原議員

新居浜市のごみ減量施策はよその町に劣っているとは思わない。松山市の話、広島市の話もよく出るが、広島市もあの大きな町で一人当たりのごみが大体 850 グラム。何が新居浜市と違うのかというと、今、日野会長も言われていたが、市民の意識である。ごみをどのようにしたら減量できるかという市民の意識を改革していくことが今から大変重要になってくるんじゃないかと思う。後藤田さん、佐々木さんらも言われたが、今新居浜市のごみ処理費は16億円くらいかかっている。1割削減できれば、1億6,000万円削減できる。それを教育費にしたりとかは何だが、ごみ減量対策をどうしたらいいかというようなことを皆さんと一緒に考えていったら、もっともっと住みやすい新居浜市ができるんじゃないかと思うが、いかがか。

まとめ

ごみの問題、すごくいろんな複雑なことが絡み合ったり、いろんな人の思いがあって、どうしたらいいかみたいな話があるが、基本はやはりごみを減らすことが自分たちの生活にプラスになるというふうなストーリー

ーを描けるかどうかだと思う。有料かどうかはまた議論すればいい話だと思うが、ごみを減らすためにどうすればいいかを考えたときに、まず、きちんと分別をする。そうすることによって、ごみが減る、資源化できるごみがふえるという話。ごみを資源化していくという話ができる。あるいは処理コストをさげることができるという話加わる。そこをしっかりとやれるということが大事だと思う。そのために具体的に、生ごみ乾燥化とか冷蔵庫の中の見直しとか、生活の仕方を変えていくということが、これから求められる。だが、そこにいたる動機づけをどういうふうにするのか。そうしたときに自分の生活、何が変わるのかということ、ある意味で自分のこととして考えられるかどうかということがすごく大事になってくると思う。そういうことを考えたときに、市民の力でできるところからスタートして積み上げていかないと、なかなかそのあたりは難しい。当然、そこに行政の応援が入るが、やはりごみに関わるのはさっき言ったように市民。すごく生活に関わることなので、一人一人の意識がそこに向いていくかいかないかということがすごく大きいと思う。そういう意味では、行政とか議員の皆さんとか市民の皆さんとかという枠を取っ払って、そういう勉強会みたいな。やはり数値目標があるので、その数値目標をどう達成するかということは、市の総合計画という一番基本的な、国でいうと憲法みたいなところで定められていることに対して、みんながどう努力してそこに近づいていけるのかというふうなことになっていかないといけないはずである。そうしたときに、ちゃんと勉強会をやりながら、

いろんな立場の人が話し合っ、話し合う回数が多いほど合意に達するし、あるいは多様な場所で勉強会を開催していくとか、そういうことがある。そういうものの積み重ねが減量につながっていくようになるというがあると思う。ぜひそういうふうなことを、一歩ずつ実現していくようなことをしていくことが大事。そういう話し合いの中から、これをやろう、あれをやろうというアイデアがいろいろ湧いてくると思うので、ぜひ新居浜のごみを減らすということを、いろんな立場の人が話し合う場ができていけば本当にいいと思う。先ほどの前半のところでも少し話したが、そういう話し合う場があることがすごく大事で、そこをしっかりと積み重ねていくことをやっていただけたらいいと思って、会場の方から意見を聞く時間がなくなってしまったので、あとでそういう場があれば意見交換していただければと思うので、一旦、私のほうの意見交換会の進行はこれで終わりたいと思う。

議会フォーラム2016議事録

日時 平成28年11月24日(木)19時～
 場所 消防4階コミュニティ防災センター

- 開会挨拶 市議会議員 近藤司
- 総合司会 市議会議員 加藤喜三男



<第一部 消防団の処遇改善について> ※敬称略

【コーディネーター】愛媛大学社会連携推進機構：前田 眞 教授

【パネリスト】

(企画総務委員会)

- ・豊田 康志議員 (委員長)
- ・真木 増次郎議員 (副委員長)
- ・山本 健十郎議員
- ・伊藤 優子議員
- ・藤田 豊治議員
- ・岩本 和強議員

(新居浜市消防団)

- ・新居浜市消防団 団長 堀田 公
- ・新居浜市消防団 副団長 飯尾 始
- ・新居浜市消防団 副団長 高橋 研一
- ・新居浜市消防団 副団長 山内 敏男

フォーラム記録

●豊田議員〈委員長主旨説明〉



南海地震がいつ起きてもおかしくないと言われている今日、今一度気を引き締めて災害に備えることが必要だと感じている。

そこで災害時において、最も身近な防災、救助の専門組織である消防団の現状について、消防団と私たち議員で活発な意見交換を行い、新居浜市の防災力向上を図るため、災害に強い、地域防災の核となる消防団を目指したいと考えている。

●前田教授

ありがとうございます。消防団の活性化に向けて、これからどういうことを議論していけばよいのかということがあるかと思うが、様々な取り組みがあるかと思うので、現場で活動されている皆さんの方から、ご提案をいただけたらと思う。少し勝手ながら、消防団の活動を考えた時に、消防団の皆さんの資質をどのような形で活性化させていったらよいのかというのがあるかと思うが、ご提案などあればご発言いただければと思うがいかがか。

●山内副団長（新居浜市消防団）

要望として、毎年、初期消火などの専門的な知識、技術を習得するため、地区別教養訓練及び市民指導員研修を受講して、校区防災訓練などにおいて、地域住民に初期消

火、応急手当などを指導するための訓練及び研修等を実施している。地域の防災力の向上を図るため、防災マップ作成要領等の教養なども実施し、危険箇所等をまとめた地域の防災マップを作成したいが、OA機器等の設備、作成する場所がないため、対応に苦慮しているのが現状である。また、地震体験施設などの体験型施設にて、実際に体験することが有効であると考えているが、現状では、体験できる施設がないため、愛媛県消防学校の地震体験車など他の設備を借用して、実体験や仮設型の訓練施設等を活用しているのが現状である。次に毎年、愛媛県消防ポンプ操法大会等が実施されているが、ポンプ操法の訓練を夜間に実施するため、照明設備及びホース延長に係る距離等が必要であり、夜間及び雨天時を含めて、各分団においても訓練場所の確保に苦慮しているのが現状である。このようなことから、防災マップ作成などの教養訓練が実施できる施設及び設備、体験施設の整備、ポンプ操法技術の向上及び各種訓練実施するための訓練施設の整備を検討してほしいと思っている。



○前田教授

ありがとうございます。まず消防団員のみなさんが専門性を獲得するための訓練や、防災マップ作成とか、団員の実際の体験提

供などが必要であるのだけれど、そのための空間、場所が足りないのではないかということだが、議員の皆さん、まず感想などはいかがか。

●伊藤優議員

今回、計画を進めている総合防災拠点施設では、初期消火や地震体験など、みなさん各地に研修しに行かれたこともあるかと思うが、体験型訓練施設や常設機器などを活用して教養訓練ができる施設の整備を検討していると伺っている。先ほどの要望にもあったが、地域の人から、防災マップ作成の指導にも苦慮していると聞いている。消防団の皆さんにも今の教養訓練に加え、さらなる知識の習得も大事なことである。そこで、防災マップを作成する場所として総合防災拠点を活用し、育成にも努めてもらいたいと思っている。また、新居浜市では地震体験を実施できる施設がなく、校区の防災訓練などの際には県の地震体験車を借りて、体験していただいているのが現状であるが、さっきも述べたように新しい総合防災拠点施設ができると解決するのではないかと思っている。また、愛媛県消防ポンプ操法大会等の訓練の実施には、小学校グラウンドの確保や、また消防庁舎前での訓練でも、訓練場所の確保が必要なのはよく聞いているので、今後建設されている総合防災拠点施設に各種訓練施設の整備を議会としてもぜひ要望したいと思っている。

○前田教授

ありがとうございます。そのへんの施設の必要性もすごくわかるが、出来た後の運営を本当に活用できるのかなという風に思うが、それでは防災マップ作りや地震の体験ができる施設があるが、それが必要な環境

や条件というのはあるのか。拠点ができればOKという感じか。

●山内副団長（新居浜市消防団）

地震体験のようなものはそれで大丈夫だが、訓練の際の場所。これは大変困っている。実を言うと、公民館に1か月くらい前もって申し込んでいるが、申し込めば消防団を優先にしてくれるが、その他の方々と競合になるので、大会前になると続けての訓練が必要になり、そうすると色々問題が出てくることもあり、困ることがある。

○前田教授

すごく大変な環境であろうと思うが、その辺はどうか。

●伊藤優議員

校区によっては優先してやってくれるということもお聞きしているが、そういうところは私達市議会も働きかけをして、何日必要なのかという計画なども立てていただいて公民館の方に申し出れば解決していくのではないかと思うがいかがか。

●山内副団長（新居浜市消防団）

言っていただくのはありがたいが、10日前になるとどうしても毎日のことになるので、その時が大変である。水を使用するので、学校によっては水を飛ばせないというところもあるし、そのあたりが大変だなと感じている。水の便も悪くて引っ張ってくる必要があるところもあるので、よろしく願います。

○前田教授

結果的に言って、そういう訓練をするのと来ていただいて訓練をするのとがあると思うが、そのあたりも含めて、具体的にその地区でこのくらいの時間やりたいというような年次当初にこういうことをやりたいと

いうのを出すのはなかなか難しいことなのか。

●山内副団長（新居浜市消防団）

当初に出すことは難しい。1年位前の段階で計画は組めるのだが、最初のうちは週に1回や月に1回くらいで進むのだが、どうしても押し迫ってくると連続の訓練になるので、ちょっと難しい。

○前田教授

その目標に向かって段々詰めていかないといけないが増えてくるということだが、そういう場所をなにか確保しなければならない部分はあるのかなと思うが。

●山本議員

先ほど伊藤委員が言ったように、私は中萩なのだが、消防団のポンプ操法の練習などについては月1回20日頃に、大体前の月に申し込みがあって、先ほど言われておったように、年のはじめに計画を伝えておけば、中萩の場合は優先で使用できていたと思う。中萩の場合は、公民館運営審議委員というのにも入っているし、そのへんお互いに我々議会の方もそういう風なことの申し入れも色々公民館等々に議長を通じてやっていきたいと思うので、その辺各校区でうまく取り組みをされたらいいのではないかと思う。

○前田教授

ありがとうございます。事前の計画と、時間をいかにその時空けてもらうのか、確保してもらうのかということ調整しながらやらなければならない部分も結構あるのかなと思う。そのあたりも今後どういう風にしてそこを詰めていけばよいのか、どのような情報提供をすればよいのかというのは、地域からも要望をこんな形で出しても

らえるといいとかがあるのか、そのへんのところを協議する場があるといいのかなと少し思った。

時間がないので、次のテーマに行くが、地域の活動拠点として、消防団には詰所があるが、そのへんのところについて何かご意見等あればお伺いしたい。

●飯尾副分団長（新居浜市消防団）

今年度、新居浜西、金子西、神郷、多喜浜、泉川分団詰所の耐震診断を実施してもらっている。今後、30年の間に70%の確率で発生すると危惧されている、南海トラフ巨大地震などの災害に備えるためにも、地域の活動拠点施設となる分団詰所の整備は、必要不可欠であると感じている。以上のことから、耐震診断結果に基づき、耐震補強等の整備を進めていただきたいと思います。次に、大規模災害発生時には、「自助・共助」による防災活動により、救出救助活動も必要不可欠と考えている。しかしながら、日頃から、資機材取扱い、また、救出救助などの訓練を積んでいないと2次災害につながる可能性も高いことから、平時から、防災訓練を実施することにより、安全、確実、迅速な救出救助活動に繋がると思っている。このことから、「自助・共助」による救出救助活動が行える活地域の活動拠点施設としての消防団詰所の検討を図っていただきたいと思います。

○前田教授

自助・共助・公助の拠点として詰所があるという話だと思うが、具体的な救出や救助としての拠点とその為に必要な装備が収められているというイメージでよいのか。ではそういう場所が、耐震が進んでいないと。大きな地震がくると崩れる可能性があるか

もしれない。それは、今話をお伺いした感じだと、かなり緊急性が高い部分があるのかなと思うがそのあたりいかがか。

●真木議員

先ほど飯尾副団長さんのほうから詰所の耐震診断等の要望があったが、私ども議会のほうにも先ほど副団長さんが言われたように新居浜西分団詰所をはじめ、今年度耐震診断を随時実施するというので報告は受けているので、その結果によって、不具合などがあるということであれば、当然耐震補強設計を行って、耐震補強工事を行うという流れになると思う。先ほど言われた、大規模災害の時には、常備消防の方は災害の中心場所に資機材や人員をどうしても集中してしまうことになってくると思うので、新居浜のあちこちで起きた小さな災害にまで手が回らないことも当然考えられるので、消防団のアンダーとしての自主防災組織とか、そういった方々の訓練も当然必要になると思うので、校区の防災訓練を通じて、防災力の向上、そういったことを図っていくように議会としても考えているのでよろしく願います。

○前田教授

自主防災組織との連携というお話がでたが、詰所を中心としてそういう活動というのは普段からされているのか。

●飯尾副団長（新居浜市消防団）

校区の防災訓練なんかにはなるべく参加させていただき、地域の人と顔見知りになれる状況というのを、普段から参加できる訓練には参加させていただいている。

○前田教授

自主防災組織に対して、救出や救助の手法を伝える訓練などもされているのか。

●飯尾副団長（新居浜市消防団）

防災訓練当日には、救急救出訓練や、人命救助訓練、人工呼吸訓練など色々な訓練を地域の方に経験していただいて、消防団だけではなくて、みなさんの協力でそのようなことを実施している。

○前田教授

そういうことを重ねていかれている部分もあるのかなと。そのための拠点がやはり不安定だと、なかなかそういう訓練も安定しなかったりとか、拠点到不安があるといざというときの動きが難しくなるのかなという感じはする。そこを色々な人に理解してもらって、そこが拠点として大切であるということの理解を広めることをしていかなければならないかなと思う。いかに啓発していくか。いざという時、自助・共助・公助の拠点になるということがうまく伝わるかということが大切だと思うがそのあたりはどうか。

●飯尾副団長（新居浜市消防団）

自分のよく知っている出身分団の話になるが、非常に詰所自体が狭い。ポンプ車、補給車2台を保有しているが、それに資機材を置くと、到底人が入れるような隙間すらない。なおかつ、災害出動時等に団員が出動してきても車などで来た団員に対しては駐車スペースが全くない。建物も昭和55年建築で、極端な話を言うと台風時に分団詰所にいると、風で詰所が揺れる。そのような建物である。なので、中で詰めていても不安になるような建物で、とりあえず雨漏り対策はしてもらったが、非常に不安になった。

○前田教授

大変な様子は非常によく伝わった。その大

変な状況乗り越えていかなければならぬので、政策として優先的に取り組んでいかなければならぬかなと思うが、そのあたりいかがか。やらなければならぬことはすごくよくわかるが、ではどのようにすれば多くの方に理解が得られるのかということをしていかないと、欲しい欲しいと言っているだけでもなかなか難しいかなという部分もあるかと思う。そのあたりどうか。

●岩本議員

平成16年の災害で私自身が体験したが、やはり本部消防だけでは、あのような大規模災害が発生した場合には対応が無理であり、分団の皆様の力を借りなければ絶対に災害対応、救助ができないということがよくわかった。南海・東南海地震は、あの平成16年災害の何十倍も、何百倍もの災害が予想されるので、まず分団の皆様の活動拠点が、出動して駐車していたら駐車違反になったとかまあ色々聞かすが、まずは耐震診断は最低限の話で、昭和57年より前の建築のものは耐震も十分備わっていないと思う。それと同時に、小学校などでもしているように、いわゆる詰所の大規模改修が必要だと思う。高津の分団が理想であると思うが、全ての詰所がその基準を満たすのは難しいが、やっぱり皆さんは中で訓練をされたり、資機材を保管されたり、また、団員同士の語りもあるだろう。そういう場所について、私たちももっと早く耐震化を進めるよう意見を強く言えばよかったが、そのへんは今回の総合防災センターもあるが本部消防の車庫も震度5か6で崩れるところにあるので、しっかり急ぐように議会も一緒に考えていきたいと思う。

○前田教授

急がなければならないことは、みんなわかることと思うが、そこをどういう風にどういう順番でやっていくのかということを含めて、情報発信しながら決めながらやっていかなければならない部分かと思う。さらに、詰所も含めてだが、装備とかはどのような状況か。その辺の待遇で言うとこのへんが不安であるとかあれば。

●山内副団長（新居浜市消防団）

消火の際に使うホースだが、耐用年数が過ぎて、一応予備として置いているが、放水すると結構破れている。その更新をしていただけると助かる。

○前田教授

耐用年数はあるのか。何年使ったら新規購入とか。壊れたら直すということか。

●山内副団長（新居浜市消防団）

耐用年数は把握していないが、壊れたものを交換している。置いているホースでも結構破れているし、ずっと置きっぱなしになっているものもある。

○前田教授

管理のいい加減さなどもあるのかもしれないが、そのへんのことについていかがか。

●藤田豊議員

近年、局所的な豪雨や台風等による災害が各地で頻繁に発生し、住民の生命、身体及び財産を災害から守る地域防災力の重要性が増大している。このような現状において、地域の防災力の充実強化の中核的な役割を果たす消防団員の皆様には、平時から、地域に密着し、災害が発生した際には、即時に対応することができるよう各種防災活動を実施していただいております。心から感謝を申し上げます。

このようなことから、大規模な災害に対応

するためには、消防団員の皆様の安全確保の装備、チェンソーなどの救助活動用資機材、発電機、投光器などの夜間活動用資機材などの計画的な整備が喫緊の課題と感じている。また、分団長以上の盛夏服等についても、経年劣化等による更新も必要であると感じている。しかしながら、各種資機材及び被服等の更新整備には、多額の費用を伴うことから、早期の整備には、関係各課の協議が必要となる。いずれにしても、大規模災害に対応するためには、必要である救助活動用資機材、夜間活動用資機材、被服等の更新整備についても、関係各課による協議を進めていただきたいと思っているのでご理解のほどをお願いしたい。

○前田教授

買い直す費用などはどこから出ているのか。市の予算か。でしたら、その辺自分たちを助けるためということで、住民の方から寄附をもらうというようなことはないのか。昔はあったが。そのような仕組みがあると、もちろんそこは公がすべき事業なので、市がすべきではあるが、先ほどの緊急性などを考えるときに、資金の調達というところ、この前伊予市で子ども食堂というのをやり始めて、その時にカーコンビニクラブという企業がそこの応援をしてくれるということで、費用を出してくれるというケースがあった。ネーミングライツというのだが、そういう企業の支援みたいなものや、地域の方からの応援を求めるということは考えられたりはしないのか。

●岩本議員

分団のみなさんには資金のお願いするような時間もないだろうし、実際仕事されながらであろうし、団員数の確保にも苦慮され

ている状況なので、私は先ほどのホースなどは悪いが本部署に言えばすぐ替えてもらえると思うのだが。大きな資機材については相談しながらということで。先生がおっしゃったことは理想であるが、団の皆さんに資金を集めてというのはなかなか難しい問題ではないかなと思う。

○前田教授

大変なことだとは思。けれど、何かやろう、市全体の仕組みとしてそういうような仕組みをつくっていくこともあると思うし、これは本当に思い付きなので、実効性があるのかできるのかは考えていかなければならないが、緊急性があつて、なおかつ市の予算が厳しいとなると、何か別の資金の調達方法も考えていかなければいけないかもしれないとは思ったのだが。

●山本議員

今日は、消防団長さんはじめ副団長さんも来ていただいているが、先ほどから予算の関係など色々あるが、新居浜西分団詰所が古いことなどもあり、詰所の耐震化もしているが、再構築、統廃合、例えば校区に1つにするなど、考えられておと思うが、資機材や耐震化、団員の問題など、校区によっては1分団とか2、3分団とかあるともあると思うが、その辺も含めて、色々話があつたように、予算の関係なんかも含めて、一番の問題は詰所の再構築、建て替えということだと思うが、その辺のお考えの中で、今言っていた要望などは解決するのではないかと考えている。寄付の問題は、おそらく消防団の方が回ったら企業も一般市民の方も寄付はしてくれると思うが、そこはやるときりがないので、新居浜市が予算を組んでやるべきだと思う。ちょっと詰

所とか団員の数とか現状の中でどんな問題があるのか、どんなお考えなのかお聞きしておきたい。

●堀田団長（新居浜市消防団）

お話のあった詰所の統合についてだが、それが一番理想かもしれないが、昔から二か所、三か所あるところについては、その地区の人にとってはあるのが当たり前で、無くなることに非常に強い抵抗を持つ方もいらっしゃる。先ほど言われておった高津分団みたいなのが一番良いとは思いますが、統一するのは難しいと思う。団員の確保についても、今現在入ってくれる方が非常に少なく苦慮している。キャラバン活動、チラシ配布などの広報活動もしているが、どのようにして増員していくか考えている。私はPTAの会などでもお願いしたらどうかという考えはある。新規の団員確保は私たちにとっても非常に頭の痛い問題である。

○前田教授

統合するという概念も、全部を今の状況のまま維持するのが難しければ、次の段階としては考えなければならない部分かと思う。また、消防団員の確保という部分については、消防団に入って、地域のために頑張ろうというような思いを持てるかどうかという部分があると思う。そのあたりをうまく情報発信しながら考えていかなければいけないのかなと思う。今日の意見交換の中で、大変な状況の中で消防団の皆様が頑張っているというのは伝わってきたと思うが、それをどういう風に、少しでも安全に、活動できるような環境をつくっていくのか。うまく発信をしていって、皆が自分たちの命を守ってくれている人なのだというような思いになってくれるようなことを伝えてい

く、理解を求めていくということも大事なのかなと思った。その分、やっぱり、その消防団の人たちの訓練の姿が住民の方、市民の方に伝わって行って、活動をちゃんとやってくれているというのを伝えていくのも大事だと思う。消防団の人たちが、地域の子どもたちにとって憧れになる。カッコいい姿をみて、ああいう風になりたいと感じる、憧れになるようなことも発信していかなければいけない部分もあるのかなと思った。地域と密接に繋がりながら活動していくことも大事なのかなと私は思った。お金が無い中で、買い直していかなければならないというのは大変かもしれないが、その必要性を訴えていくのは、消防団の皆さんも進めていくことが必要なのかな。ではどういう風に、何を訴えていけばいいのか、それを話し合う場を作って、じゃあこういうことを訴えていこうとか一緒になって訴えていこうとか、要望すると同時に、一緒に考えていくことができたらいのかなと思った。これからも対話が続いていくことによって、ひとつの方向性が見えていくのかなと思った。フロアに来られている皆さんからの意見があれば。

一般からの意見

●消防団関係者

先ほどの意見の中で、校区のグラウンド等の確保というのがあり、公民館にお願いするというのがあったが、公の場をこういうポンプ操法のような訓練をする場合には、先ほど議員さんも言ってくれたように優先的に使用させていただいているのだが、それが、今副団長が言われたように、最後の大会があった場合には、ずっと何週間も使

うとなるとその場所的には地域のボランティアさんが使用されているので難しい。私の提案としては、河川敷等にひとつそういう所を作ってほしいと思っている。今度、色々新居浜市が消防操法大会に出た時にどうしても上位に食い込めないというような問題がある。皆昼間は働いているので、必然的に夜に練習になるが、夜になれば照明の問題が発生する。そして一番問題なのが、水利の問題である。水利をいつでも使えるというような場所があれば、どの分団でも車で走って行って、その場所で練習できるというような場所をぜひ確保していただきたいなと思っている。



○前田教授

河川敷で夜間に使用できる、水が使えるというようなことが出来たらいいというご提案だが、今のお話についてどうか。

●豊田議員

ごもっともなご意見だと思うので、河川敷の照明など難しい問題があるが、ただ、現実的に今、公民館で調整をしながら訓練をしているような状況であっても、他のボランティア団体の方々とのトラブルもあるというお声も当然聞いているし、ただ、50年間の間で、災害が起きると予想される現在において、消防団の人員の確保であったり、最大限に協力をしていかなければいけ

ない案件だと思っているので、今後委員会の中で、喧々諤々真面目に議論していきたい。

まとめ

○前田教授

今後、そういう対話ができるのであればいいのかなと思う。先ほどの設備も常設じゃなくて、仮設でも大丈夫かもしれないので、やり方を色々考えるといいかなと思う。

議会フォーラム2016議事録

日時 平成28年11月24日(木)19時55分～

場所 消防4階コミュニティ防災センター

■第二部司会

市議会議員 仙波 憲一

<第二部 若年層の市外への流出対策について> ※敬称略

【コーディネーター】愛媛大学社会連携推進機構：前田 眞 教授

【パネリスト】

(市民経済委員会)

- ・高塚 広義議員(委員長)
- ・田窪 秀道議員(副委員長)
- ・加藤 喜三男議員
- ・大條 雅久議員
- ・伊藤 謙司議員
- ・米谷 和之議員

- ・新居浜工業高等学校 校長 渡邊 郁雄
- ・新居浜商業高等学校 教頭 曾我部 弘
- ・新居浜商工会議所 専務理事 秦 誠一
- ・ハローワーク新居浜
上席職業指導官 福井 誠司

■閉会挨拶 市議会副議長 永易 英寿



フォーラム記録

●高塚議員〈委員長主旨説明〉



本市には5つの高校と高専、高等技術専門学校があるが、卒業生の何割かは市外や県外へ流出している実態があり、地方創生における人口定着を進める上で、若年層のための雇用環境を創出する施策を積極的に行うことが、地域の人口減少であったり、少子化を抑えるためには効果的と言える。今回は「若年層の市外への流出対策について」をテーマに、この中でも特に若者の雇用対策等について考えてみたいと思う。

○前田教授

今、少し高校とか高等専門学校も含めて卒業生の市外流出という話があったが、この辺の少し実態も含めて、今日は工業高校の校長、商業高校の教頭先生に来ていただいているので、その辺り実態も含めてご意見を聞かせていただければと思うが、じゃあ、工業高校の渡邊先生から。

●渡邊校長（新居浜工業高等学校）

進路状況については現在、3年生が159名。そのうち138名が就職を希望している。159名のうち約4割が新居浜管内の就職を希望している。

●曾我部教頭（新居浜商業高等学校）

本校は3年生、137名が在籍をしている。そのうちの84名が就職を希望しているという

状況である。11月15日現在では管内、新居浜市内で就職が決まっている生徒が36名、ただ事業所の所在地別に分けているので、管外、西条とか四国中央市も事業所で分けているが、そのうちの10名程度は市内での就職という形になっている。また、詳しい状況については何かあればお知らせしたいと思っている。

○前田教授

市内への就職でいうと、少ないというイメージか、それともそれぐらいが妥当かなみたいな感じか。目標をどこに置かにかにもよると思うが。

●曾我部教頭（新居浜商業高等学校）

本校は女子の生徒が多いというのが特徴であり、在校生のほとんどが地元への就職ということを希望しているので、先ほど言った36名というのが、実際の新居浜市内での就職ということになっているが、例年とはほぼ同じような状況ではあるかと思う。まあ、もう少し地元に着定してくればありがたいかなというのが、率直な感じである。

○前田教授

地元に着定するために、こんなことがあったら良いとか、こういうことが必要でないかということが学校の先生の立場であるか。

●渡邊校長（新居浜工業高等学校）

ご質問の回答ではないが、先ほど本校の実情をお伝えしたが、138名の就職希望者のうち、管内が62名、そして愛媛県内が53名、県外が22名という現状である。こういう状況で、ちなみに、今年度の求人については、県内求人が386名、県外が699名、併せて1,085名である。そういう状況の中で本人、保護者等の希望により学校が推薦というこ

とで行っている。これは10月末現在のデータである。

○前田教授

求人数がやっぱり県外の方が多い感じですね。曾我部先生はどうか。

●曾我部教頭（新居浜商業高等学校）

本校では県外への就職というのが、今現在では7名。昨年度では11名という数であるが、管内も含めた県内への就職が多いという状況であろうというように思っている。

○前田教授

学校によって少し差があるのかな、というように思うが、今の状況を少し聞かれてみて、何か若い人たちに定着してもらうために、みたいなことを含めて、何か御意見とか御発言があればと思うがいかがか。

●大條議員

お聞きして、ある程度想定をしていたが、商業高校の生徒さんたちは本当、新居浜のお母さんになる方々だなという感想をずっと持っている。だから、市内に高専を含め5つの高校と1つの高専ということで、6つの高校・高専があるが、どうしても県外の大手企業に入れるならば、それを選んだら、という親御さんのお気持ちがまだまだあるのかな、という心配を今、ずっと持っている。従来で言えば、やっぱりできれば東京、大阪へという思いで来た子どもたちが、子どもたちの思いというよりも親御さんの思いではなかったのかな、ということが最近気になる。TVコマーシャルでコーヒーマシーンが、インターネットに繋がって、朝、年老いた父なり母がコーヒを飲んだのを確かめられるという。これ、便利というよりも奇妙な世の中になったなという思いがあり、やっぱり決して人生の中

の選択というのが、やっぱり親御さんの思いも変わっていかなきやいけないし、子どもたちに社会の在り方というか、世の中の、まちの在り方というのを、やっぱり伝えていく責任が逆に今、学校の先生方、親にあるんじゃないかなと思っているが、そういったことを学校の中で取り上げるといったことは、なさっているのか。

○前田教授

その辺りはいかがか。

●曾我部教頭（新居浜商業高等学校）

本校の生徒は、地元就職をしたいという思いを持っている生徒が多いと思う。本校を卒業した母親が、子どもも商業に行かせてあるという家庭もたくさんあるので、そ



ういう意味では親子共、新居浜を愛してという感じが多いんじゃないかというふうに思っている。まして、本校は創立が市立という関係もあるので、そういう新居浜市との繋がりも深いという意味でも、新居浜に愛着を持っている生徒が多いというふうに思っている。また、授業の中で、というようなことであったが、今年度から本校は商業高校なので、商人学という授業も含めて、新居浜の別子銅山のことも含めて指導していくと、より新居浜に愛着を持たせるといふような形で、授業を展開していくと、これは学校設定科目という感じでやっている

ので、そういう意味では商人学を取り入れる意義というのは深いのかな、というふう
に思っている。

○前田教授

渡邊先生の所はそういうふうな制度という
か、ライフデザインという大げさだが、
これからの暮らし方みたいところで、何
かそういうことをされているというのはあ
るのか。

●渡邊校長（新居浜工業高等学校）

お手元の学校案内の中に、平成 27 年度次代
を担う地域産業技術者育成事業という取り
組みの概要をお配りしている。これは 3 年
間をかけて、地域産業界を担う人材を育て
ようという取り組みの一環で、愛媛県の予
算事業である。平成 20 年度から 3 年間は 2
つの学科で実施した。その後、平成 23 年度
から 3 年ごとにモデルチェンジして取り組
んでいる事業である。そこに、ご覧頂いた
ら分かると思うが、企業見学、インターン
シップ、リアルシステム、はたまたそうい
う取り組みをして地域理解、地元企業の理
解とか、そういうことを加えてやっている
ということでイメージしている。

○前田教授

そういう努力をしながら、地元に対する愛
着だとかを高めているというようなことを
されているというふうなことだと思うが、
その辺の成果みたいなのはまだもう少し時
間がかかりそうな感じか、それとももう見
えてきているという感じか。感覚的な話で
良いと思うが。

●渡邊校長（新居浜工業高等学校）

地域産業界の方々には大変お世話になっ
ており、しかし「あれだけお世話したのに就
職していただけない」というようなお言葉

を頂戴することもある。しかし、長年地域
産業界の方々と新居浜工業高校が連携を取
らせていただいております、その連携体制とい
うのは深まっているというふうに感じてい
る。その中で、学校としてできることはさ
せていただくという感じではやっている。
生徒の資質、能力が高まっていっているとい
うのは実感している。そのプリントの裏
側に新聞の記事などが出ているが、こうい
う取り組みをして地域の方々に理解をいた
だいて、生徒たちが活躍する場というのは
できていると、私は 4 月から新居浜工業高
等学校に来てお世話になっているので、他
校の話ではあるが、私に関わってきた学校
がこういう取り組みを通して、「旋盤の職人
目指して練習中、上手くなるほど遠く感じ
る」という、とても奥の深い感覚をその取
組みの中で身につけてきた。というのを
ある高校の先生から教えてもらった。その
学校もこのような取り組みをしている学校
である。

○前田教授

議員の皆さん、今のような話を聞いてい
てどうか、何かこういうことをもっと応援
できるとかはあるか。

●加藤議員

今、学校の先生からのお話はいろいろお聞
きました。それで受け入れ側の商工会議所な
り、それから機械産業協同組合であり、そ
の受け入れ側との話し合いの頻度は多くで
きているのか。そうでないと、新居浜にど
ちらの学校も愛着を持っておられるとい
うのは分かるが、新居浜に就職される方が少
ない。その辺の問題がどこかにあるのでは
ないかと思っている。だからその辺を突き
詰めていかないと、これからの新居浜に残

ってくれる人が少なくなるんじゃないかと思ったりしている。

○前田教授

その辺りを考えていった時に、学校だけではなくて、産業界というか、その辺の所の取り組みがあるのでは、と思うが、商工会議所としてこんな取り組みをされているみたいな所も含めてお話いただければと思うが。

●秦専務（新居浜商工会議所）

地元経済界の立場から発言をさせていただくが、御存じの通り新居浜市内においても労働力の不足というのは、特に中小企業において深刻な問題となっている。団塊の世代と言われている、いわゆる経験豊富な従業員の多くが雇用を延長されているが、年々年もとって退職をされている。特に当市の基幹産業である、ものづくり関係の業種では熟練技能者の人手不足感が非常に高まっているというような状況にある。商工会議所の会員の中からは、景気が回復している今、事業を拡張しようと計画し、そのための求人を出しても新規雇用に結びつかず、新たな設備投資に対応できる従業員が確保できない。そういった声が聞かれるなど、地域経済の持続的発展を図るということを大きな命題としている新居浜商工会議所としては、若年の人材確保というのが、非常に喫緊の課題となっているというのが現状である。こうした現状を踏まえて、先だって10月25日には石川新居浜市長と近藤新居浜市議会議長に対して、行政施策に対する要望書を提出した。その中で雇用関係の施策については、新居浜市の奨学金返済支援事業の高校生への補助対象の拡充と、県立新居浜高等技術専門校の卒業生の地元

企業への就職促進を図るための職業訓練奨励金制度の創設、この2項目を要望させていただいたところである。また、先ほど学校との関係の御発言もあったが、商工会議所の中に事務局を設けている雇用対策協議会。この中での取り組みとして新居浜市ハローワークと連携を行い、説明会の開催、また、東予地域の高等学校の就職担当者の教員による地元企業への産業視察、そして懇談会、また、インターンシップ派遣前マナー講座の実施など、そういった事業を実施し生徒、先生方、そして企業との情報交換を進めて、できるだけ多くの地元高校生が地元企業に就職できるような、そういった取り組みを雇用対策協議会の中でも進めている。

○前田教授

すごく学校側も頑張っているし、経済界もがんばっているし、ハローワーク新居浜の福井さんにも、今の状況も含めたお話をいただけたらと思うが。

●福井指導官（ハローワーク新居浜）

現状と言うか、かつては高校生の就職に対して企業さんに求人を出していただきたいということで、お願いをして回った時があったのだが、今は逆で、求人の方が就職を希望する生徒さんよりも多くなっているの、逆に企業さんの方に、ハローワークに求人を出しても人が来ない、というような相談を受けることがある。やはり、ここ最近新しく、先ほど商工会議所さんもおっしゃっていたように、求人を出したというような場合だと、今まで求人を出されている所などは親御さんが知っていたりだとか、先輩が就職していたりだとかということ知名度があるのだが、やはり久しぶりに求

人を出したりだとか、初めて求人を出したりだとかする所はどうしてもイメージ的に皆さん掴めないという、生徒さんもそうだし親御さんも掴めないということになっているので、昔のように求人を出したら人が来るというような時代ではなくなって、生徒さんたちも選べるような時代となっているので、企業さんのアピールも少し必要になって来ているのではないかと思いますし、そういう場を提供できる機会などを設けていくのが必要ではないかというふうに感じている。

○前田教授

企業も選ばれる存在に少しなってきたところがあるのかな、そうするとやっぱりそういう人たちに来てもらいたいための環境とか、職場環境とかも含めて、そういうのも考えていかなければいけない時代になってきているのかなと思うのだが、今の、こう、経済界も頑張っているし、中間に入ってそこを応援しようとする人たちも頑張っているし、学校も頑張っている。でも管内の就職率が低い、これは何がやっぱり問題なのか、どこを解決したら良いのか、みたいな所を探っていかなければいけないと思う。その辺りはどうか。

●田窪議員

今、お話を聞いて、新居浜商工会議所さんの現在の会員数、2,425社。これだけあって昨年度の高校、高専も職業訓練校も含めて、平成27年度ベースで1,018人しか卒業しないうちの中で、700名が大学やそういう専門学校へ行った。残り3割しか残っていない。これが市内、県外へ就職した人で、結局市内へ就職した人というのは161人しか居なかった。2千4百数社ある企業集団で、161

名。これが多いのか少ないのかはまた判断していただけるのだと思うが、企業側は毎年7月までにハローワークさんに対して求人を出すということなのでしょうけど、やはりそれを、そういうことを知らない、まだそういう中小企業さんも多いのではないかと私は思う。それと、一方で今日は校長先生と教頭先生が来られているが、割と就職に関しては就職担当の先生が居るので、そこら辺のことはちょっと分からないけれども、やはり就職担当の先生は、就職を希望している生徒の成績とか実習のランク付けをして、やはり求人が来た企業の優劣で上から下へと、そういう職をあてがっているのではないかなと、そういう所はまた特に親の関与も関係してくるので、やはり市内中小企業へ就職するんだったら、先生が勧めてくれた市外、県外の大企業の方が良いのではないかと、そういういきさつも入っているのではないかと私は思う。そういう中でやはり先ほど秦専務も言われたように、企業集団である商工会議所とハローワークさんが常々横の連携は取られているのだろうが、やはりそういう高校の先生方と商工会議所、そしてハローワークこの3つの連携が上手く回ってないような気が私はする。そこが上手く回れば今より就職率が少しでも上がってくるのではないかなと思う。

○前田教授

多分、今のお話を聞いていると、それぞれがやっぱり頑張っているんだけど、何か相乗効果が上がらないというようなことが見えているのかな、というような気もするが。米谷さんいかがか。

●米谷議員

この意見交換会の準備で、市の方へお話しを伺ったり委員会の中でも協議をしたり、やはり先ほどおっしゃったように、若年の人材不足であるとか確保が大きな課題になっている訳であるが、その原因はごく簡単に言うと市内の若い子たち、これは保護者の皆さんも含めてなのだが、市内の事業所さんのことをまだまだ知らない方がたくさんいらっしゃるのではないかということが話題になった。他市の事例であるが、例えば工業高校さんは授業の一環として市内の事業所をバスで回るような見学会をやられているように伺っているが、他市の事例ではランダムに希望者を募って市内の事業所さんをバスツアーで回るというような取り組みをやられている所がたくさんあるというふうに伺っている。これはもちろん高校生だけではなく、都会に、例えば就職して新居浜に帰りたいな、新居浜に適当な企業さんはないかな、という方なども応募できる訳だが、そういうバスツアーをやられている所がかなりたくさんあるというふうに伺っている。それと最近先ほど保護者ということを申し上げたが、このバスツアーが就職する本人ではなく、その保護者の方を対象にしたバスツアーと、市内の事業所を回るツアーというようなものも始まっているというふうに伺っている。それとまた別の所の事例であるが、つい先日、新潟の南魚沼市に視察に行かせていただいた。雇用とか若者の就職がテーマではない視察だったが、南魚沼では若者定住マガジン、先ほど前田先生からライフデザインというような話もあったが、ライフインというようなマガジンを発行しているというふうに伺った。これは市内に暮らすということを

テーマにしている小冊子であるが、当然その中で雇用であるとか就職であるとか、働くということは非常に大きなウエイトを占めている。デザインの的にも大変すっきりしたもので、ああ、こういうものであれば若い人たちに南魚沼市の街、あるいはその事業所、そこで働いている人たちを知ってもらう大きなきっかけになるんじゃないかと思った。

○前田教授

情報の発信の仕方と、誰に発信するのかみたいな話があったかなと思うが、さっきの保護者、親御さんとか、先生とか、あるいはさっきの企業だとか、もっとすれば高校生、若い人たち、そういう人たちに向けて何をどう発信していくのか、どういう体験を積んだらよいのかみたいな話のときに、当事者の高校生だけではなくて、保護者とかを巻き込んで一緒に企業の体験をしていくとかみたいなのは、すごくこんな企業があるということを知ってもらうとか、そこで働いている企業の人たちが生き生きとしているかどうかとか、みたいな所もあると思う。そこをこう、ああいうふうになりたい、憧れの存在になるような人たちが身近に居るか居ないかとか、それは技にもあるかなと思うが、よく最近NHKで「すご技」みたいなのがやられている。そういう技術のすごさというのが大きな企業でなくて中小企業がそこを担っているんだ、みたいなことは、多分新居浜のあちこちにあるんじゃないかなと、そういうのを上手く発掘できるのか、ここにそういうすご技を持っている人がいるんだ、その人と話ができる、することによって色んな考え方が浮かんでくるだとか、あるいは新居浜で生活し

た人たちが幸せそうに生活している、親がこんな所にも、とか言うんじゃないで、ここにいてこんな幸せになるんだ、みたいなことを見せられるとか、というようなこともやっぱり伝えていくというか、気づきの提供みたいなものができてこないといけないような気もするが、そんな親子のバスツアーみたいなものは、やろうと思えばできるのか。

●秦専務（新居浜商工会議所）

親子ではないが、父兄の方を対象に中小企業の現場を見てもらうということで、来ていただいて、いわゆる父兄のインターンシップというようなことは実施している。ただ、実際現場を見てもらって理解していただいて、ここなら、となれば良いが、たまに、これだったら…、と親の意見がちょっと強い場合があるので、現場を見て逆にちょっとためらうというようなケースも実際の所そういうケースが出ているので、その辺は痛しかゆしかなという部分はある。

○前田教授

企業のどこを見たら良いのか、見るポイントみたいなことも伝えていかないと、中々頭の中に大きな企業で安定してみたいな所があると、どうしてもそこに偏ってしまいがちになる部分があるのかな、と思う。そこをこう逆転をしてもらうために何が必要なのかとか、こういう伝え方をしたら良い、みたいな話があるかなと思う。そうすると、今の少子高齢化になった時に親御さんが少し年を取った時に、子供さんが近くにいたほうが良い。そういうふうな判断もやっぱりあるかも知れない、みたいなこともあると思うので、就職という一時点だけを目標にするのではなくて、就職を手段として考

えて、これから先そこでどういう生活をしていくのか、みたいなことを伝えていくってすごく大事なことなのかなというふうに思うが、そういうのが重なっていく、すぐには中々効果が生まれないかもしれないと思うが、新居浜でそうやって暮らしていくことの大切さみたいなのはあるのかな、と思う。そういう所も含めて上手く情報を発信していくということが出来ていけば、色んなしくみが今すごく充実してあって、マッチングもしっかりやれているし、というのもあるが、マッチングした時に何を掴んで帰るのか、そこで何を掴んだら良いのか、みたいな所の、そこの指導ではないが、気づきの提供みたいなものをしていければ良いかなというようなことを少し思った。中々すぐ効果が出てくることは無いかもしれないが、我々の愛媛大学も県外から6割の学生が来ていて、県内の学生が4割しか居ない。愛媛のことを今一生懸命伝えようとしているが、県外から来る学生にとっては、何で愛媛のことを勉強せないかんのというふうなことにどうしてもなってしまう。そこで我々は、愛媛のことを勉強することがこれからの生活の中でためになることがたくさんあるので、そういう視点で見てくださいみたいな話をしているが、多分それと同じような状況がやっぱりあって、新居浜のことを勉強していくことが、自分のこれからの生き方についてすごく関わってくる。新居浜での暮らし方みたいなものが伝わっていくようなことが、要るのかなというようなことを思いながら今の話を少し聞かせていただいた。

●伊藤謙議員

先ほど先生が色々と言われていたが、僕、

新居浜人なので、新居浜の男子限定であるが、太鼓台というのが一番残る。男の子は残る理由だと思う。西条などはだんじりを触っても良いというような話になっているが、新居浜の高校生は、工業の校長先生がいらっしゃるが、やっぱり男の子は太鼓台をいちばん触りたい年頃である。そこを解禁していただいたら、さっき言っていた新居浜への地元愛が湧いて、地元へ残ってもらえるのではないと思うが、どうか。

●渡邊校長（新居浜工業高等学校）

その事については軽々には私の立場でお答えはできない。過去の経緯があるというのは重々承知しているので、ここで検討させていただきますというのは、検討した人たちもいるので、それは、申し訳ない。

●伊藤謙議員

まあ確かに色々と、怪我等々PTAの方も、僕も高校のPTAもやったので、確かに難しいとは思いますが、今皆さんが議会も含めて色々な機関が頑張っている所で、もう行く所まで詰めてはきていると思う。後、何が足りないかと言えば、やっぱりさっき言っていた愛情、地元愛というのがやっぱり足りないのではないかと。私も太鼓を触っているが、太鼓を触る男子が少なくなってきた。これは多分今までは色々と諸先輩方がいらっしゃるが、こういうような現象は無かった。が、ここに来てだんだん愛情が薄くなってきている所をプラスアルファするのであれば、高校の先生に言っても仕方が無いが、高校生の太鼓参加を解禁してあげるとというのが先生、一番効果的な早い所じゃないかなと僕は思っている。

○前田教授

一つの御意見として、承っておく。今日、

会場に来られている皆さんも若い人の定着に向けてやっぱりこういうことが要るんじゃないかとか、こういうことが必要かな、みたいなこともあるかと思うが、今日この会場に来られている皆さんはどうか。

一般からの意見

（会場意見なし）

まとめ

●前田教授

それでは今の祭りが地元愛を育てるというのはすごく大事なポイントかなというふうにするが、たぶんそこを底辺にしながら、ベースにしながら、やっぱり企業の人たちは選ばれる企業にならないといけないし、そうすると自分たちの企業の良い所、うちにきて働くということが実現できるんだとか、いうふうなことを例えば伝えないといけないと思うし、保護者の皆さんはやっぱりそういう暮らし方、自分のこれからの将来のことも含めていったときに、やっぱり身近に自分の子どもさんたちが居ることの安心感みたいなものを伝えていくんだとか、というのもあるかもしれないし、高校の先生の皆さんはやっぱり地元学、地元をちゃんと愛するという機運をいかに盛り上げるかとか、そういう地元の情報を的確に伝えていくということがあるかな、ということがあると思うし、間に入って中間の応援をされる方はその両者を上手く繋いでいけるような形ができていけば良いかな、で基本はそういう意味での気づきの提供、情報の提供、受発信をどうするのか、受け取る側のアンテナが無いといくら発信しても受け取れないというのがある。じゃあ、

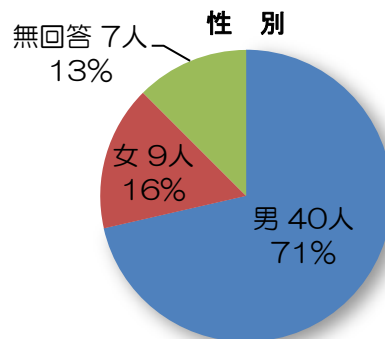
それをどういうアンテナを張ってもらえたら良いのかという所も含めて考えていくことってすごく大事なのかも知れないな、そこまで考えていかないと単に発信したよ、だけでは伝えたつもりになっていて、実際伝わっていないということもたくさん出てくるかなと思う。伝えたつもり、をちゃんと伝わったという形にしていくための工夫みたいなものをもっと重ねていくというのがすごく大事なのかなというのを思いながら聞かせてもらった。こういうことも、こういう話し合いの場が続いていくこと、さっきのお祭りのことも含めて皆が納得できるような方向性を見出していく。成果が上がらなかつたら、何が課題なのかというのをもういっぺん見つけだして行ってそこを見直していくということを重ねていかないといけないので、改善していく動き、そこを重ねていくようなことをしていくためにはこういう対話が必要なので、もう少し膝詰で話ができるようなことができるかなと思った。これを契機にまた、新しい話し合いの場がスタートして行って、新しい提案ができていければ良いかなということを書いてこの会を閉じさせていただきな、というふうに思う。終始熱心な御議論をいただき、つたない進行であったがこれで二部の方を終わりたいと思う。

3 (1) 来場者アンケート調査 (11月21日)

■来場者にアンケート調査を実施し、56人（回収率61.5%）から回答を得た。

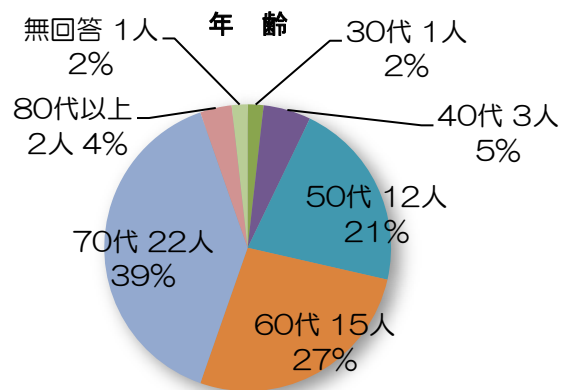
①性別

来場者の性別は男性が40人（71.4%）
女性が9人（16.1%）、無回答7人（12.5%）
となっている。



②年齢

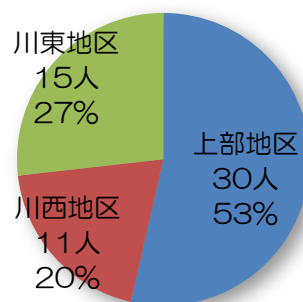
来場者の年齢は30代が1人（1.8%）
40代が3人（5.4%）、50代が12人（21.4%）
60代が15人（26.8%）、70代が22人（39.3%）
80代以上が2人（3.6%）となっている。



③お住まい

来場者の住まいは上部地区が30人（53.6%）
川西地区が11人（19.6%）、
川東地区が15人（26.8%）となっている。

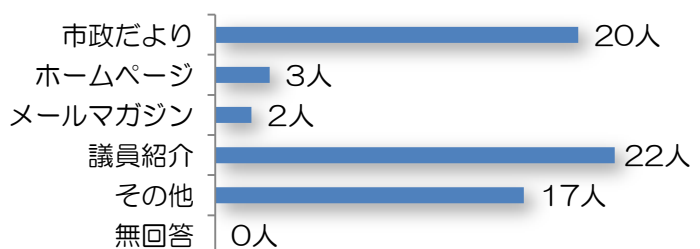
お住まい



④参加のきっかけ（複数回答）

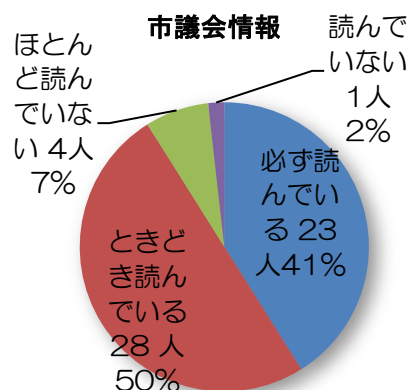
市政だより 20人、議員紹介 22人、
その他（団体からの要請など）17人が
多数を占めている。

参加のきっかけ



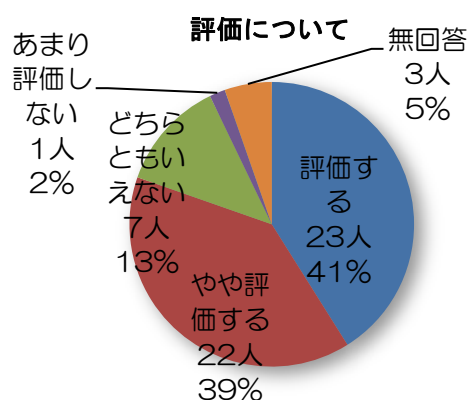
⑤市議会情報

市議会だよりの情報については、必ず読んでいる 23 人 (41.1%)、ときどき読んでいる 28 人 (50.0%)、ほとんど読んでいない 4 人 (7.1%)、読んでいない 1 人 (1.8%) となっている。



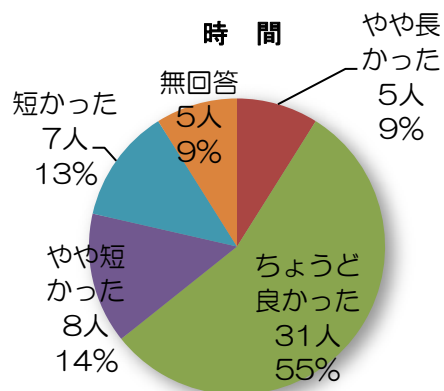
⑥評価について

フォーラム開催の評価については、評価する 23 人 (41.1%) やや評価する 22 人 (39.3%) をあわせて、約 8 割の参加者が評価していると回答した。



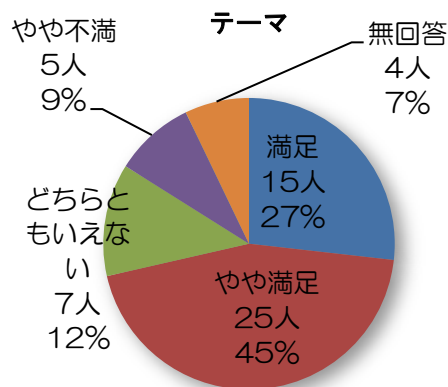
⑦時間について

開催時間については、ちょうど良かったが 33 人 (55.4%) と、半数以上の参加者がちょうど良いと回答した。



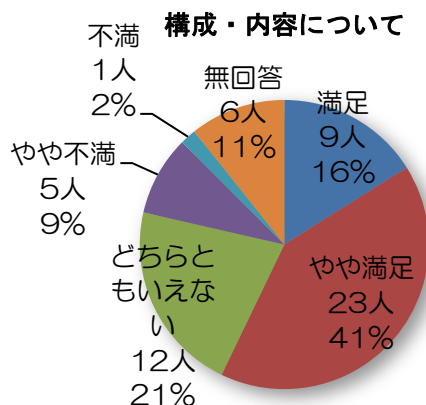
⑧テーマについて

テーマについては、満足 15 人 (26.8%)、やや満足 25 人 (44.6%) をあわせて、約 7 割の参加者が満足と回答した。



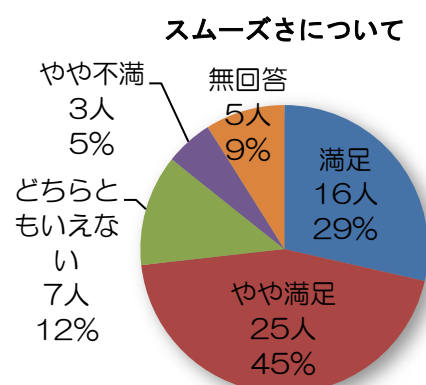
⑨構成・内容について

構成・内容については、満足 9 人 (16.1%)
やや満足 23 人 (41.1%) をあわせて
約 6 割の参加者が満足と回答した。



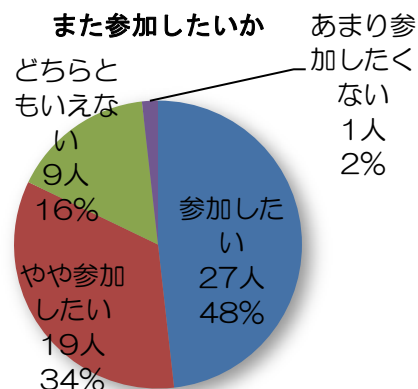
⑩スムーズさについて

会のスムーズさについては、
満足 16 人 (28.6%)
やや満足 25 人 (44.6%) をあわせて
約 7 割の参加者が満足と回答した。



⑪また参加したいかについて

フォーラムにまた参加したいかについては、
参加したい 27 人 (48.2%)
やや参加したい 19 人 (33.9%) とあわせて
約 8 割の参加者が参加したいと回答した。



⑫自由意見

○議会フォーラムに初めて参加させていただきました。前田先生のお話もとても分かりやすく、今の保育園の現状や保育士不足のため、子どもたちの受け入れ先が難しくなっており、今の時代働くお母さんが増えている一方、保育士・子どもたちが安心して過ごせる環境づくりや、人材確保が出来たらと思うばかりです。貴重なフォーラムありがとうございました。

(40代 女性)

○パネラー全体で今後どうするかの調整が欲しかった。提案聞きたかった。(60代 男性)

○一つのテーマの意見交換が短い。(60代 男性)

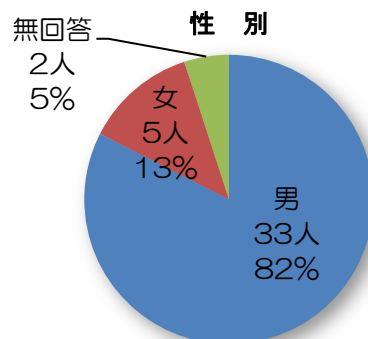
- もう少し意見の広がりを見ると、2回／年～の機会を持ち、最終改善に近づけるようにできればと思います。(年齢不明 男性)
- メリットのある件は対応して、少しでも早く実現してほしい。(70代 性別不明)
- 組織とルール作り、生活している市民とのかかわり(生ごみはできます)、ごみの分別。(70代 男性)
- 今回はテーマをしぼって、中身のある意見交換会だったと思いました。(60代 女性)
- 参加者(一般市民)の意見を聞く仕組みを考えてもらいたい。(特定の方に集中しないように)(50代 男性)
- コーディネーターの方がうまくまとめてくれて良かった。(40代 女性)
- 大きな課題なので、各テーマで現状時間は必要。保育士の待遇改善は、緊急課題である(特に私立保育園)。ゴミステーション方式の徹底と指針を行政より提出の事。(60代 男性)
- 大きなテーマであるので、短時間に二つもやるのはどうか。(70代 性別不明)
- パネラーの話が長いので、簡明な説明を願いたい。コーディネーターの問いに対して、かみ合っていない話があった。(50代 男性)
- 資源回収の話なかった。(50代 性別不明)
- ごみ有料化は不法投棄を増やすだけ。余計な費用がかかる。松山のようなパンフレット出してください。(80代以上 女性)
- 保育士不足は、待遇面で11万円安い賃金、重労働などが原因であることがよく判った。子ども二人を保育園に預けて働き続けたので、討議の内容がよく判った。働きたい女性には切実な問題。国の予算の増額、とりあえずは市の保育士への賃金補てんなどが必要だと思った。ごみの問題…段ボールで堆肥化している。花や野菜の成長に効果は大きいですが、虫がわくので嫌がる人が多い。広めていく上で一番の問題です。(70代 女性)
- テーマをしぼって開催したので、わかりやすかった。客観的な立場で進行できるコーディネーターを配置したことは、これまでと比べて良くなった点だと思う。(40代 女性)
- 保護者の意見を聞くべきだと思う。(70代 男性)
- フォーラムのテーマを別に分けるべき。(70代 男性)
- 時間が短い。我々の意見が言えなかった。(70代 男性)
- テーマの中身、方向性をしっかりと。(60代 男性)
- 委員会毎にテーマをしぼって、もっと時間をかけてほしい。小さいテーマができれば、他にもつながってくる。議員さんの発言がない。意見交換になっていない。当日の状況表の公表をしてください。一市民に向けて。(70代 男性)

3 (2) 来場者アンケート調査 (11月24日)

■来場者にアンケート調査を実施し、40人(回収率59.7%)から回答を得た。

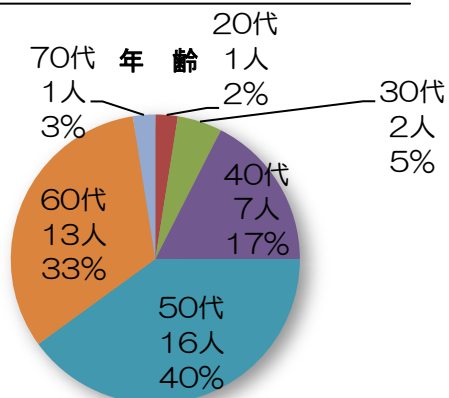
①性別

来場者の性別は男性が33人(82.5%)、
女性が5人(12.5%)、無回答2人(5.0%)
となっている。



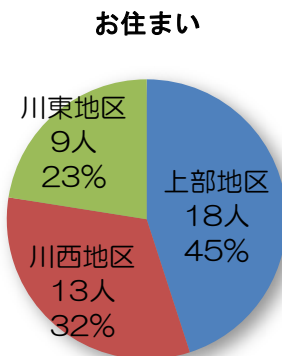
②年齢

来場者の年齢は20代が1人(2.5%)、
30代が2人(5.0%)、40代が7人(17.5%)、
50代が16人(40.0%)、
60代が13人(32.5%)、70代が1人(2.5%)
となっている。



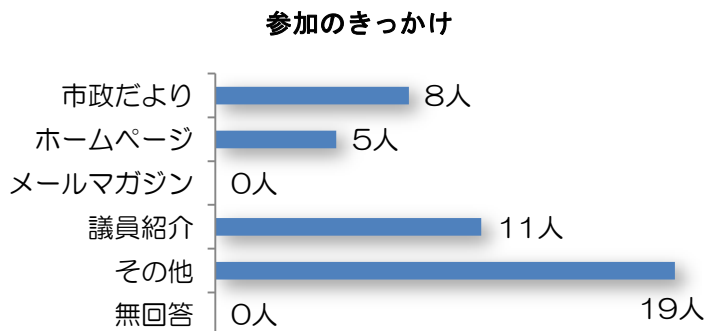
③お住まい

来場者の住まいは上部地区が18人(45.0%)、
川西地区が13人(32.5%)、
川東地区が9人(22.5%)となっている。



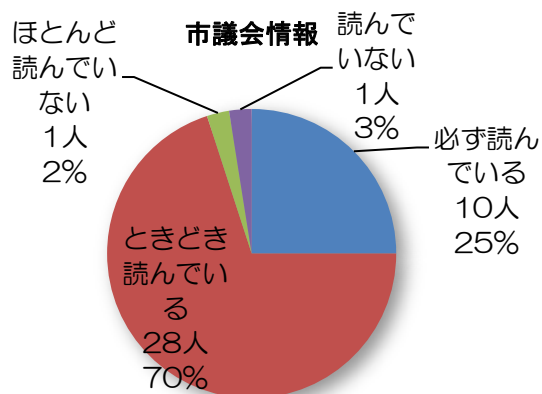
④参加のきっかけ(複数回答)

市政だより8人、議員紹介11人、
その他(団体からの要請など)19人が
多数を占めている。



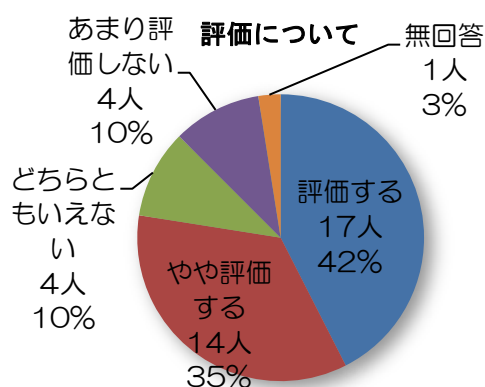
⑤市議会情報

市議会だよりの情報については、必ず読んでいる10人(25.0%)、ときどき読んでいる28人(70.0%)、ほとんど読んでいない1人(2.5%)、読んでいない1人(2.5%)となっている。



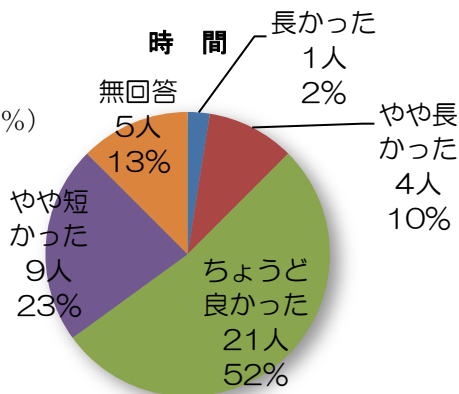
⑥評価について

フォーラム開催の評価については、評価する17人(42.5%)、やや評価する14人(35.0%)をあわせて、約8割の参加者が評価していると回答した。



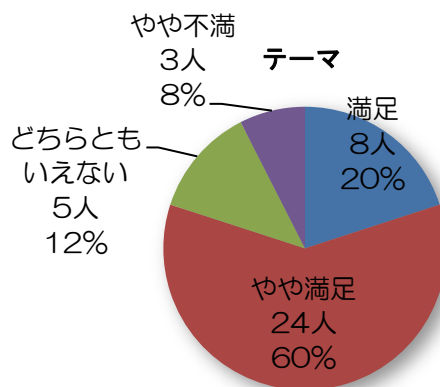
⑦時間について

開催時間については、ちょうど良かったが21人(52.5%)と、約半数の参加者がちょうど良いと回答したが、やや短かったと回答した人も9人(22.5%)いた。



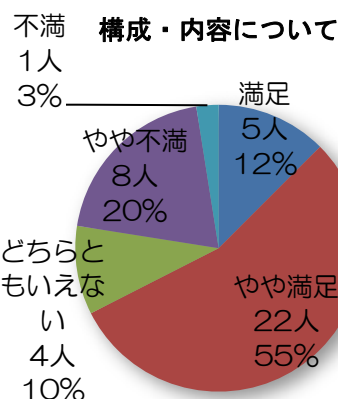
⑧テーマについて

テーマについては、満足8人(20.0%)、やや満足24人(60.0%)をあわせて、約8割の参加者が満足と回答した。



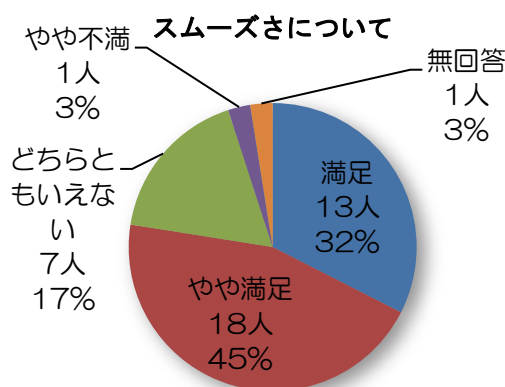
⑨構成・内容について

構成・内容については、満足 5 人（12.5%）
 やや満足 22 人（55.0%）をあわせて
 約 7 割の参加者が満足と回答したが、
 やや不満と回答した人も 8 人（20%）いた。



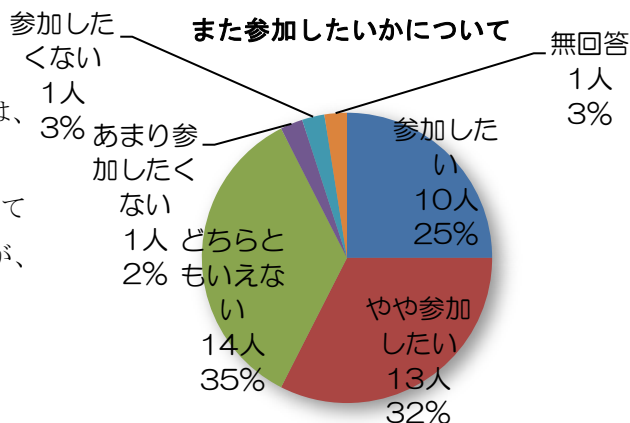
⑩スムーズさについて

会のスムーズさについては、
 満足 13 人（32.5%） やや満足 18 人（45.0%）
 をあわせて約 7 割の参加者が満足と回答した。



⑪また参加したいかについて

フォーラムにまた参加したいかについては、
 参加したい 10 人（25.0%）
 やや参加したい 13 人（32.5%）とあわせて
 約 6 割の参加者が参加したいと回答したが、
 約 3 割の参加者 14 人（35.0%）は
 どちらともいえないと回答した。



⑫自由意見

- 若年層の市外への流出対策について、市議会と学校側と別な所で話をすれば。（60代 男性）
- 議員の回答が趣旨から外れたものが多かった。不安を感じた。予め作成してきた原稿を読み上げるのではなく、団体からの要望を正しく理解した上で考えを述べていただきたかった。その観点から言うと、二部の学校関係者の受け答えは的確であったと思う。（50代 男性）
- 初めての参加でしたが、日ごろ自分たちが思っていること、考えていることが、現状認識、改善、向上等討議され、参加して良かったと思っている。若年の流出防止…高校に入る時点で本人が強い目標意識を持つことが重要であろうと考える。親子、先生でしっかりと取り組むこと。

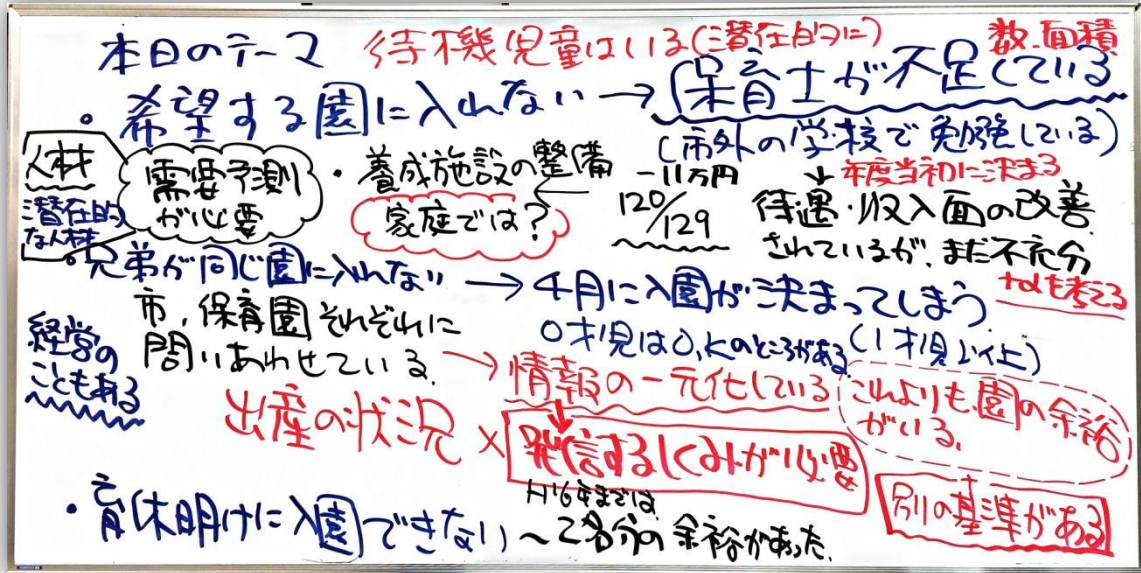
- 高校は入れば良い、出れば良いでは×。自分で将来を決める大切な時期。(60代 男性)
- 自分に必要だと思うテーマは参加したい。(50代 男性)
- 消防団員 人口減少の現状では、人員確保の難しさがあるので、人員以外での対応に目線を考えての方法を考えてみては。(60代 男性)
- 前半について…意見も多数出て良かったと思う。実行できるものから実施願いたい。地元志向はあるが、十分に吸い上げしていない。若者にとって新居浜は住みよいか、住みたいか。(60代 男性)
- 本日の意見交換会の式次第はないが？我々の提案をフォーラムだけでなく、十分に検討してください。議員と分団長の意見交換を多くしてほしい。(60代 男性)
- 市議会議員の皆様は消防団活動に対して本当に理解してもらっているのか？です。(50代 男性)
- もう少し突っ込んだ意見交換が聞きたい。(40代 男性)

4 資料編 (会場ホワイトボード)

■ 11月21日 (月)

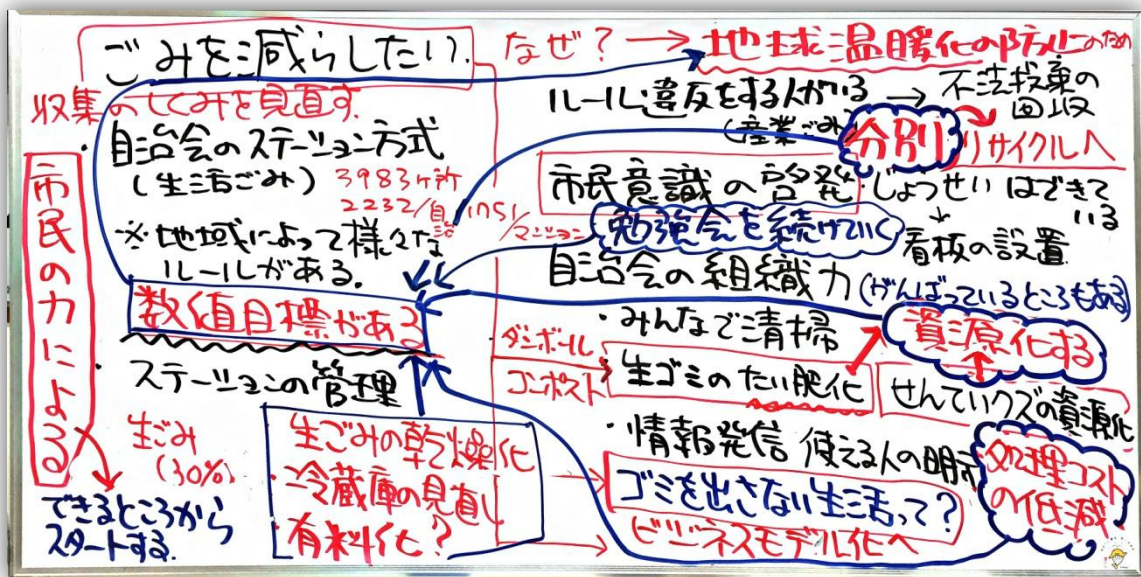
第一部 福祉教育委員会

テーマ:「保育園の課題について」ホワイトボード



第二部 環境建設委員会

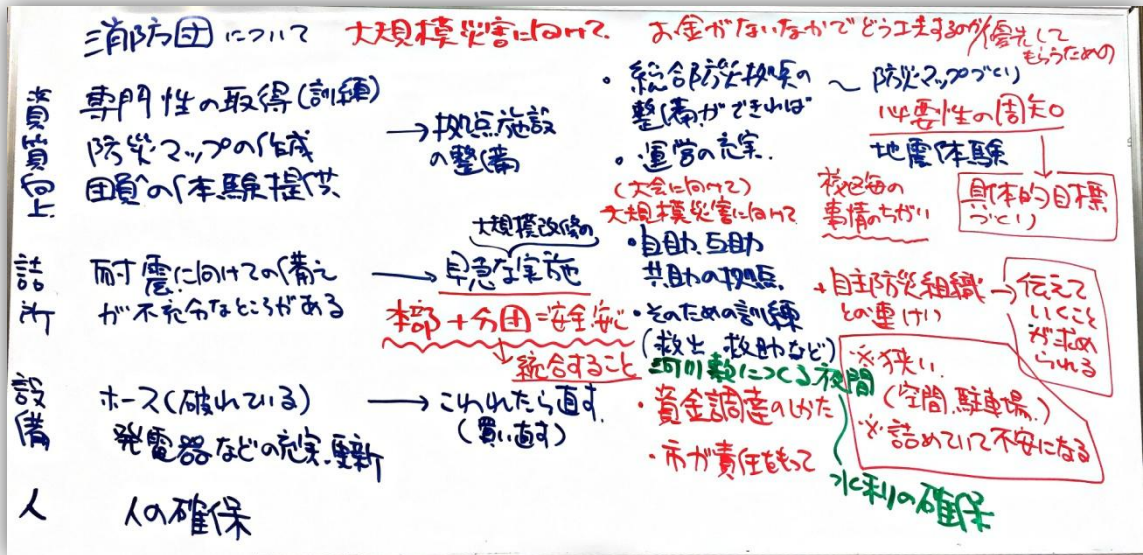
テーマ:「ごみの減量について」ホワイトボード



■ 11月24日 (木)

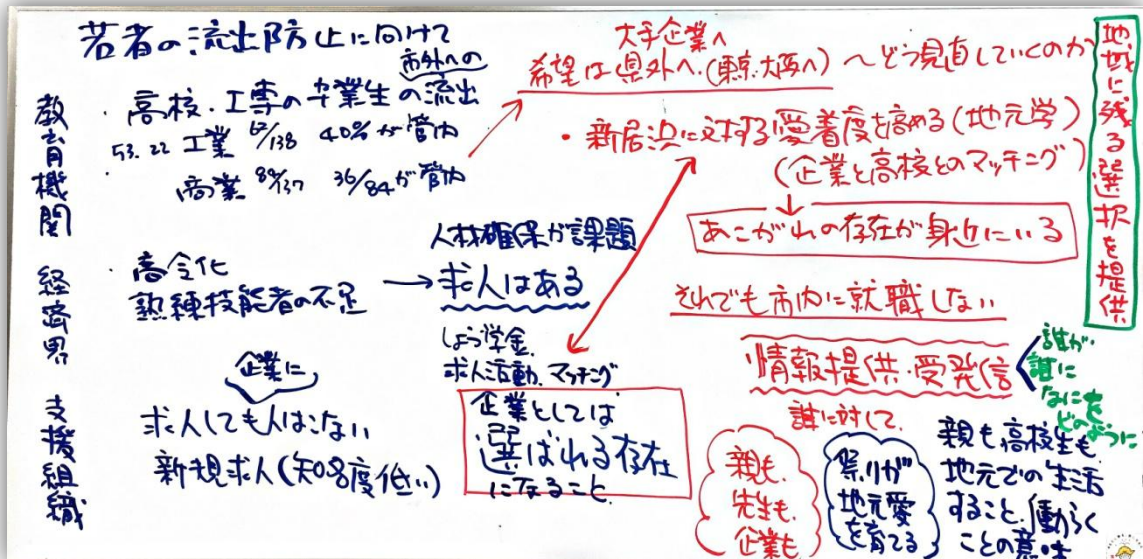
第一部 企画総務委員会

テーマ: 「消防団について」 ホワイトボード



第二部 市民経済委員会

テーマ: 「若者の流出防止策について」 ホワイトボード



新居浜市議会市民との意見交換会 議会フォーラム 2016



新居浜市議会市民との意見交換会
議会フォーラム 2016 開催報告書

平成 28 年度

平成 28 年 12 月作成

新居浜市議会事務局

電話 0897-65-1321 (直通)

FAX 0897-65-1322